

—国道212号(中津道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)—

伊藤田田中遺跡 屋敷田遺跡

2010

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した、国道 212 号(中津道路)道路改良工事に伴う、伊藤田田中遺跡と屋敷田遺跡の発掘調査報告書です。

調査を行った中津市は、周防灘に面する沖代平野などの平野部と、洪積台地である下毛原台地、そして八面山から伸びる低丘陵が織りなす比較的なだらかな地形を呈する地域で、古来より人々の生活が営まれ、著名な遺跡も数多くあります。今回報告する二遺跡は、洪積台地のいわゆる下毛原台地と犬丸川を隔てた沖積地に位置する古代から中世の遺跡で、中でも古代については官道の一部や製鉄炉が、中世については集落の一面から館跡が見つかるなど、大きな成果を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、今回の調査に御協力いただいた多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

平成 22 年 3 月 31 日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長 佐藤 英 一

例 言

- 1 本書は大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受け実施した、伊藤田田中遺跡と屋敷田遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は国道 212 号(中津道路)道路改良工事に伴って、平成 17 年度に屋敷田遺跡 1 次(A 区・C 区)と伊藤田田中遺跡 1 次(A、B 区の一部)、同 18 年度に伊藤田田中遺跡 2 次(A、B 区の残り)と C、D、E、G 区)、同 19 年度に屋敷田遺跡 2 次(B 区)と伊藤田田中遺跡 3 次(F 区)の調査を実施した。なお、伊藤田田中遺跡は、調査時は「野依地区条里跡(田中地区)」と呼称していたが、調査区まで条里が及ばないことが明らかになったので、平成 19 年度に遺跡範囲の変更と新規遺跡の登録を行い、「伊藤田田中遺跡」としたものである。
- 3 伊藤田田中遺跡 2 次と屋敷田遺跡 2 次・伊藤田田中遺跡 3 次の調査については、一部業務をそれぞれ明大工業株式会社と東海アナース株式会社に委託して実施した。
- 4 製鉄炉関係の遺物の整理については、穴澤義功氏(たたら研究会)に委託して実施した。また、鉄滓等の各種集計については姫野久恵(大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託)の協力を得た。
また、放射性炭素年代(AMS)測定については(株)加速器分析研究所、製鉄関係遺物の金属学的分析は(株)九州テクノリサーチ、自然遺物の分析は(株)古環境研究所にそれぞれ委託して実施した。
- 5 本文中で標記した遺構番号(S-番号)は、遺物注記との整合性を保つため、現場段階のものをそのまま使用している。そのため、後に遺構ではないことが明らかになったものなどにより欠番が生じている。なお、調査段階では遺構の種別にかかわらず通し番号であるため、遺構種別ごとには通し番号とはなっていない。また、伊藤田田中遺跡において、本報告書では詳細を記さなかった遺構については、各区の遺構配置図に S 番号を記入しているので、附表 4)「伊藤田田中遺跡遺構一覧表」を参照のこと。
- 6 図中で示した座標は、世界測地系である。方位も座標北を示している。
- 7 出土遺物は、大分県教育庁埋蔵文化財センターですべて保管している。
- 8 本書の執筆は、第 1 章から第 3 章(F 区関係以外)と第 6 章を小柳和宏(大分県教育庁埋蔵文化財センター主幹)、第 3 章(F 区関係)と第 4 章を江田豊(大分県教育庁埋蔵文化財センター主幹)が行い、小柳と江田が編集を行った。
なお、第 5 章第 1 節は(株)加速器分析研究所、同第 2 節は(株)九州テクノリサーチ、同第 3 節は(株)古環境研究所によるものである。

目次

序文		3) 中世水田及び関連遺構	153
例言		4) 出土遺物	158
第1章 はじめに	1	5) 近世水田及び関連遺構	159
第1節 調査に至る経緯	1	第5節 小結	163
第2節 調査の経過	1	第5章 自然科学的調査の成果	164
第3節 調査組織の構成	3	第1節 伊藤田田中遺跡における放射性炭素年代 (AMS)測定(加速器分析研究所)	164
第2章 遺跡の立地と環境	4		164
第1節 地理的環境	4	第2節 伊藤田田中遺跡における製鉄関連遺物の分析 (九州テクノリサーチ)	168
第2節 歴史的環境	4		168
第3章 伊藤田田中遺跡	8	第3節 屋敷田遺跡の自然遺物の分析 (古環境研究所)	186
第1節 調査の概要	8	第6章 総括	195
第2節 遺構と遺物	11	附表	
1) 各区の概要	11	1) 伊藤田田中遺跡鉄関連主要要素一覧表	202
a A区	11	2) 日本古代の製鉄遺跡の編年と系譜	204
b B区	11	3) 伊藤田田中遺跡遺物観察表	205
c C区	11	4) 伊藤田田中遺跡遺構一覧表	209
d D区	15		
e E区	15	写真図版	
f F区	16	報告書抄録	
g G区	16		
2) 古代	17		
a 道路跡	17		
b 製鉄炉跡	18		
c 溝跡	36		
3) 中世	40		
a 館跡	40		
b 集落跡	103		
c 水路・水田跡	125		
4) 近世以降	131		
溝跡・水田跡	131		
第3節 製鉄関係分析用遺物の考古学的観察	135		
第4節 小結	141		
第4章 屋敷田遺跡	142		
第1節 調査の概要	142		
第2節 各調査区における遺構番号の統一	143		
第3節 層序	144		
第4節 遺構と遺物	145		
1) 掘立柱建物	145		
2) 溝	146		

挿図目次

- 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡
第2図 遺跡周辺の地形と調査箇所
第3図 遺跡周辺の小字集成図
第4図 旧字図による田中集落部分旧字図
第5図 調査区配置図
第6図 A区～E区遺構配置図
第7図 A区遺構配置図
第8図 B区遺構配置図
第9図 C区遺構配置図
第10図 D区遺構配置図
第11図 E区遺構配置図
第12図 F区遺構配置図
第13図 G区遺構配置図
第14図 A区連続不定形土坑(道路跡)
第15図 A区不定形土坑
第16図 C区製鉄炉跡
第17図 製鉄関連遺物構成図(1)
第18図 製鉄関連遺物構成図(2)
第19図 製鉄関連遺物(1)
第20図 製鉄関連遺物(2)
第21図 製鉄関連遺物(3)
第22図 製鉄関連遺物(4)
第23図 製鉄関連遺物(5)
第24図 製鉄関連遺物(6)
第25図 製鉄関連遺物(7)
第26図 製鉄関連遺物(8)
第27図 製鉄関連遺物(9)
第28図 A～D区第1号溝実測図
第29図 A～D区第1号溝土層断面図
第30図 A～D区第1号溝出土遺物(1)
第31図 A～D区第1号溝出土遺物(2)
第32図 B区第2号溝実測図
第33図 B区第2号溝出土遺物
第34図 A区館部分遺構配置図
第35図 A区第1号堀実測図
第36図 A区第1号堀内土器廃棄土坑
第37図 A区第1号堀廃棄土坑拡大図
第38図 A区第1号堀出土遺物(1)
第39図 A区第1号堀出土遺物(2)
第40図 A区第1号堀出土遺物(3)
第41図 A区第1号堀出土遺物(4)
第42図 A区第1号堀出土遺物(5)
第43図 A区第1号堀出土遺物(6)
第44図 A区第1号堀出土遺物(7)
第45図 A区第1号堀出土遺物(8)
第46図 A区第1号堀出土遺物(9)
第47図 A区第1号堀出土遺物(10)
第48図 A区第1号堀出土遺物(11)
第49図 A区第1号堀出土遺物(12)
第50図 A区第1号堀出土遺物(13)
第51図 A区第1号堀出土遺物(14)
第52図 A区第1号堀出土遺物(15)
第53図 A区第1号堀出土遺物(16)
第54図 A区第1号堀出土遺物(17)
第55図 A区第1号堀出土遺物(18)
第56図 A区第1号堀出土遺物(19)
第57図 A区第1号堀出土遺物(20)
第58図 A区第1号堀出土遺物(21)
第59図 A区第1号堀出土遺物(22)
第60図 A区第1号堀出土遺物(23)
第61図 A区第1号堀出土遺物(24)
第62図 A区第1号堀出土遺物(25)
第63図 A区第1号堀出土遺物(26)
第64図 A区第1号堀出土遺物(27)
第65図 A区第1号堀出土遺物(28)
第66図 A区第1号堀出土遺物(29)
第67図 A区第1号堀出土遺物(30)
第68図 A区第1号堀出土遺物(31)
第69図 A区第1号堀出土遺物(32)
第70図 A区第1号堀出土遺物(33)
第71図 A区第1号堀出土遺物(34)
第72図 A区第1号堀出土遺物(35)
第73図 A区第1号堀出土遺物(36)
第74図 A区第1号堀出土遺物(37)
第75図 A区第1号堀出土遺物(38)
第76図 A区第1号堀出土遺物(39)
第77図 A区第1号堀出土遺物(40)
第78図 A区第2号堀実測図
第79図 A区第2号堀出土遺物(1)
第80図 A区第2号堀出土遺物(2)
第81図 A区第2号堀出土遺物(3)
第82図 A区第1号掘立柱建物実測図
第83図 A区第2号掘立柱建物実測図
第84図 A区第3号掘立柱建物実測図
第85図 A区第4号掘立柱建物実測図
第86図 A区第5号掘立柱建物実測図
第87図 A区第6、7号掘立柱建物実測図
第88図 A区第1号土坑実測図
第89図 A区第1号土坑出土遺物
第90図 A区第2号土坑実測図
第91図 A区第2号土坑出土遺物
第92図 A区第3号土坑実測図
第93図 A区第3号土坑出土遺物
第94図 A区第1号井戸実測図
第95図 A区第3号溝実測図
第96図 A区第4、5号溝実測図
第97図 A区第5号溝出土遺物
第98図 A区第6号溝実測図
第99図 A区第6号溝出土遺物
第100図 A区第7号溝実測図
第101図 A区第7号溝出土遺物
第102図 A区出土の遺物(1)
第103図 A区出土の遺物(2)
第104図 A区出土の遺物(3)
第105図 B区第8号溝実測図
第106図 B区第8号溝出土遺物
第107図 B区第9号溝実測図
第108図 B区第9号溝出土遺物
第109図 B区第10号溝実測図
第110図 B区第11号溝出土遺物
第111図 B区第8号掘立柱建物実測図
第112図 B区第9号掘立柱建物実測図
第113図 B区第3号井戸実測図
第114図 B区第4号土坑実測図
第115図 B区第4号土坑出土遺物(1)
第116図 B区第4号土坑出土遺物(2)
第117図 B区第5号土坑実測図
第118図 B区第5号土坑出土遺物
第119図 B区その他の出土遺物(1)
第120図 B区その他の出土遺物(2)
第121図 C区第12号溝実測図
第122図 C区第12号溝出土遺物(1)
第123図 C区第12号溝出土遺物(2)
第124図 C区第13号溝実測図
第125図 C区第10号掘立柱建物実測図
第126図 C区柱穴等出土遺物
第127図 D区第14号溝実測図
第128図 D区第14号溝出土遺物(1)
第129図 D区第14号溝出土遺物(2)
第130図 D区第15号溝実測図
第131図 D区第16号溝実測図
第132図 D区第15、17号溝出土遺物
第133図 D区第6号土坑実測図
第134図 D区第7号土坑実測図
第135図 D区第7号土坑出土遺物
第136図 D区第4号井戸実測図
第137図 D区第4号井戸出土遺物
第138図 D区出土の遺物
第139図 F区第11号掘立柱建物実測図
第140図 F区第8号土坑実測図
第141図 F区第8号土坑出土遺物
第142図 F区第9号土坑実測図
第143図 F区第10号土坑実測図
第144図 F区第11号土坑実測図
第145図 F区第9号土坑出土遺物
第146図 F区第12号土坑実測図
第147図 F区第12号土坑出土遺物
第148図 A区土層断面図
第149図 E区第17号溝実測図
第150図 E区第17号溝出土遺物実測図
第151図 D-E区横断土層断面図
第152図 D-E区横断土層位置図
第153図 F区第18号溝実測図
第154図 F区第19、20号溝実測図
第155図 G区南壁土層断面図
第156図 G区第21号溝実測図
第157図 G区出土遺物実測図
第158図 近世の遺物(1)
第159図 近世の遺物(2)

第160図	近世の遺物(3)
第161図	調査区及び遺構配置図
第162図	B区北壁土層図
第163図	SD-18実測図
第164図	SD-18出土遺物実測図
第165図	SD-1(A区)実測図
第166図	SD-1(B区)実測図
第167図	SD-1(C区)実測図
第168図	SD-4実測図
第169図	SD-5実測図
第170図	SD-6実測図
第171図	SD-7実測図
第172図	SD-8~9実測図
第173図	SD-11実測図
第174図	SD-4~5出土遺物実測図
第175図	A区、B区中世水田関連遺構分布図
第176図	畦畔20実測図
第177図	畦畔21実測図
第178図	畦畔22実測図
第179図	SD-2(A、B区)実測図
第180図	SD-3実測図
第181図	SK-17実測図
第182図	中世水田面及び関連遺構出土遺物実測図
第183図	A、B区近世水田関連遺構配置図
第184図	畦畔24実測図
第185図	畦畔25実測図
第186図	畦畔26実測図
第187図	SX-19実測図
第188図	近世水田層出土遺物実測図
第189図	屋敷田遺跡周辺字図
第190図	[参考]暦年較正グラフ(1)
第191図	[参考]暦年較正グラフ(2)
第192図	屋敷田遺跡プラント・オパール分析結果
第193図	屋敷田遺跡における花粉ダイアグラム
第194図	伊藤田田中・屋敷田遺跡の時期別変遷
第195図	伊藤田地区の歴史的環境(古代~中世)
第196図	官道と宇佐宮の関係

表目次

第1表	下毛原台地周辺の遺跡
第2表	製鉄関連遺物遺構別組成表
第3表	製鉄関連遺物集計表(1)
第4表	製鉄関連遺物集計表(2)
第5表	製鉄関連遺物集計表(3)
第6表	製鉄関連遺物集計表(4)
第7表	坏A形式と坏B形式の割合
第8表	製鉄関係分析資料一覧表
第9表	各調査区遺構番号統一表
第10表	B区北壁土層観察表
第11表	SD-1(A区)A-A' 土層観察表
第12表	SD-1(A区)B-B' 土層観察表
第13表	SK-16土層観察表
第14表	年代測定結果一覧表
第15表	暦年較正年代一覧表

第16表	分析資料対比表
第17表	プラント・オパール分析結果表
第18表	屋敷田遺跡における花粉分析結果

図版目次

図版1	伊藤田田中遺跡2次調査分 空中写真1(上が北) 同上2(上が北)
図版2	伊藤田田中遺跡2次調査分 空中写真3(西から) 同上4(東から)
図版3	伊藤田田中遺跡1次調査分 空中写真(上が北) 伊藤田田中遺跡2次調査北東 角から望む
図版4	伊藤田田中遺跡A区古代道路跡 伊藤田田中遺跡C区古代製鉄炉跡
図版5	A区北半の完掘状況・A区北半 の完掘状況(不定形土坑)・A区第 3号、4号、5号溝(右から)・A区第 1号溝・A区第1号溝土層断面A・A区 南半の第1号、2号堀(北から)・A 区南半の第1号堀完掘状況(南か ら)・A区第1号堀土層断面
図版6	A区第1号堀土層断面・A区第1号 堀内廃棄土坑・A区第1号堀内廃 棄土坑・A区第1号堀内廃棄土坑・ A区第1号堀内廃棄土坑・A区南半 第1号堀完掘状況(南から)・A区 第1号堀耕作部分の立ち上り部(右 側に杭が2本見える)・A区北半第 1号堀完掘状況(北から)
図版7	A区第1号堀(東西方向部分)完 掘状況(西から)・A区第2号堀土 層断面・A区南西部第1~4号掘立 柱建物・A区南半調査状況・A区第 1号土坑・A区第1号井戸検出状況 ・A区第1号井戸・B区北半完掘状況
図版8	B区南半完掘状況・B区第1号溝 調査状況・B区第1号溝土層断面B ・B区第1号溝完掘状況・B区第8号 溝(南から)・B区第4号土坑折敷 出土状況・B区第3号井戸・B区柱 穴遺物出土状態
図版9	C区第12号溝・C区製鉄炉検出状 況・C区製鉄炉東排滓坑・C区製鉄 炉東排滓坑・C区製鉄炉東排滓坑 ・C区製鉄炉東排滓坑土層断面・C 区製鉄炉西排滓坑・C区製鉄炉東 排滓坑
図版10	C区製鉄炉完掘状況・C区製鉄 炉炉床部の状況・C区製鉄炉完掘 状況(東から)・D区調査区西端土 層断面・D区第4号井戸・D区第6号

土坑・D区とE区間の土層状況・
D区第17号溝

図版11	F区全景・F区SB-1完掘状況・F 区SD-2完掘状況・F区SK-5・SD-3・ SD-4検出状況・F区SK-5完掘状況
図版12	F区SK-5銭出土状況・F区SK-6 ~8・SD-2検出状況・F区SK-7完掘 状況・F区SK-8完掘状況・F区SK-9 完掘状況
図版13	G区第22号溝検出状況・G区第22 号溝・G区南西壁の状況・G区第21 号溝・G区第21号溝
図版14	伊藤田村絵図
図版15	伊藤田田中遺跡製鉄関係遺物 (1~21)
図版16	伊藤田田中遺跡製鉄関係遺物 (22~58)
図版17	伊藤田田中遺跡製鉄関係遺物 (59~79)
図版18	伊藤田田中遺跡製鉄関係遺物 (80~102)
図版19	伊藤田田中遺跡製鉄関係遺物 (103~119)・同出土遺物
図版20	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版21	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版22	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版23	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版24	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版25	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版26	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版27	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版28	伊藤田田中遺跡出土遺物
図版29	屋敷田遺跡空中写真(2次調査 分)
図版30	屋敷田遺跡SB-1・同SD-1
図版31	屋敷田遺跡SD-5~SD-8・同畦畔
図版32	屋敷田遺跡畦畔・同SD-3・同SK-16 ・同SD-2・同SX-19
図版33	屋敷田遺跡出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

中津道路は、中津港から日田市までのいわゆる中津日田道路の一部をなす路線である。路線は国道213号(旧国道10号線)の犬丸地区から、現国道10号線(中津バイパス)の伊藤田地区までの約2km区間の新設道路で、大部分が盛土工法による立体交差となる。

同区間は平成10年12月に整備区間となり、同14年度に分布調査を実施した。その結果、周知遺跡は1ヶ所(野依地区条里跡：後に調査地点は伊藤田田中遺跡として新たな遺跡で登録)であるものの、その他7ヶ所で遺跡の可能性のある地点が確認された。そして、平成14年度以降買収できた地点から順次試掘調査に入るようになった。

平成15年1月に3ヶ所(内、1ヶ所が後に本調査される上畑成遺跡^{かみはたなり}*¹)、同8月に3ヶ所、同11月に3ヶ所(内、2ヶ所が後に本調査される馬下遺跡^{もうり}*²と野田遺跡^{のり}*³)の試掘調査を行い、同16年3月には1ヶ所で立会調査、同9月に1ヶ所(後に本調査を実施する北小枇杷遺跡^{きたこびわ}*⁴)、同17年1月に1ヶ所、同2月に1ヶ所(後に本調査される屋敷田遺跡)同6月に1ヶ所、同8月に1ヶ所(後に本調査される田代遺跡^{のり}*⁵)、同9月に1ヶ所、同12月に1ヶ所(後に本調査される伊藤田田中遺跡)、同18年7月に1ヶ所(後に本調査される諸田南遺跡D地区^{のり}*⁶)で試掘調査を行った(調査箇所は当初の8ヶ所以外に増加)。

その結果、同区間は大部分が平坦地とはいえ過去に圃場整備を実施している田園地帯であり、遺跡がすでに削平されていることが懸念されていたが、合計8ヶ所で遺跡が確認され、順次本調査が実施された。

伊藤田田中遺跡と屋敷田遺跡の2遺跡については、用地買収の関係から複数年度に渡る調査となった。

第2節 調査の経過

本書で報告する2遺跡について、調査の経過を述べる。

(伊藤田田中遺跡1次調査)

平成17年5月29日	調査開始(重機による表土剥ぎ)
6月9日	遺構検出作業開始
8月27日	隣接地(東側)試掘調査
9月29日	B区北側半分を重機により表土剥ぎ
10月3日	A区北側半分を重機による表土剥ぎ
10月4日	遺構検出作業
10月11日	遺構掘り下げ開始
11月26日	空中写真撮影
12月1日	調査区埋戻し開始
12月4日	調査終了

*¹ 『諸田南遺跡D地区 田代遺跡 上畑成遺跡 馬下遺跡 一般国道212号(中津道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008

*² *¹ に同じ

*³ 『北小枇杷・野田遺跡 一般国道212号(中津道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007

*⁴ *¹ に同じ

*⁵ *¹ に同じ

*⁶ *¹ に同じ

(伊藤田田中遺跡 2 次調査)

平成 18 年 6 月 12 日	重機による表土除去開始
6 月 13 日	G 区遺構検出作業
6 月 19 日	B 区遺構検出、掘下げ開始
6 月 13 日	D 区遺構検出、掘下げ開始
6 月 13 日	G 区遺構検出作業
7 月 6 日	B 区にて SD-5(古代の溝)検出、トレンチ掘下げ
8 月 10 日	C 区にて製鉄炉検出
9 月 7 日	A 区遺構検出作業
9 月 28 日	空中写真撮影
10 月 3 日	A 区製鉄炉切り取り作業
10 月 19 日	調査終了

なお、調査中、大澤正己氏(九州テクノリサーチ)、藤本啓二氏(国東市教育委員会)には製鉄遺構について現地で指導を頂いた。記して感謝申し上げます。

(伊藤田田中遺跡 3 次調査)

平成 19 年 6 月 6 日	調査開始(重機による表土剥ぎ)
6 月 7 日	遺構検出、全体写真撮影
7 月 25 日	空中写真撮影
7 月 26 日	調査終了

(屋敷田遺跡 1 次調査)

平成 18 年 1 月 7 日	調査開始(重機による表土剥ぎ)
1 月 9 日	水田関連遺構確認
1 月 27 日	座標測量
3 月 3 日	A 地区全景写真撮影
3 月 12 日	調査区埋戻し開始
3 月 18 日	調査終了

(屋敷田遺跡 2 次調査)

平成 19 年 5 月 22 日	調査開始(重機による表土剥ぎ)
5 月 31 日	近世水田層関係遺構検出、掘下げ
6 月 4 日	掘立柱建物検出
6 月 8 日	重機により、中世水田層まで掘り下げ
6 月 11 日	中世水田層掘下げ開始
7 月 12 日	中世水田下の遺構(SD-01)検出
7 月 25 日	空中写真撮影
7 月 27 日	調査終了

第3節 調査組織の構成

本書で報告する2遺跡について、年度ごとの調査体制は下記のとおりである。

(平成17年度)

埋蔵文化財センター 所長 渋谷忠章
 次長兼総務課長 益永孝則
 調査第一課長 栗田勝弘
 調査第一課大型事業担当主査 矢部勝徳(伊藤田田中遺跡1次・屋敷田遺跡1次担当)
 " 嘱託 河原英明(伊藤田田中遺跡1次担当)
 " 嘱託 権藤聡子(屋敷田遺跡1次担当)

(平成18年度)

埋蔵文化財センター 所長 小玉学司
 次長兼総務課長 岡本義博
 調査第一課長 栗田勝弘
 調査第一課大型事業担当主幹 小柳和宏(伊藤田田中遺跡2次担当)
 調査指導 別府大学教授 飯沼賢司
 なお、伊藤田田中遺跡2次調査の調査支援委託をおこなった明大工業株式会社の担当は下記のとおりである。

調査技師 牟田健二
 調査助手 野崎哲司

(平成19年度)

埋蔵文化財センター 所長 福田快次
 次長兼総務課長 岡本義博
 次長兼調査第一課長 坂本嘉弘
 調査第一課大型事業担当主幹 江田 豊(屋敷田遺跡2次・伊藤田田中遺跡3次担当)
 なお、屋敷田遺跡2次調査と伊藤田田中遺跡3次調査の調査支援委託をおこなった東海アナース株式会社の担当は下記のとおりである。

調査技師 萩 幸二
 調査助手 角上寿行

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

山国川河口に開ける標高 5m ほどの沖積平野である沖代平野^{おきだい}に対して、その東側に展開する標高 20m 前後の^{しもげばる}下毛原台地は南北約 4 km 東西約 3 km の平坦面を有しているものの、微視的に見ると南西から北東方向に幾筋もの小谷が伸び、起伏に富んだ地形を呈する。この台地の土地利用状況を見ると、明治 30 年段階では台地奥部(南西部)に谷水田が、海岸に近い部分ではやや広い地域に水田が広がっており、台地中央部の平坦面は畑地や山林であった。この土地利用状況は、江戸時代中期初めの元禄 2(1689) 年に開削された荒瀬井路によるところが大きく、これ以前はため池灌漑に依存した、小規模な水田経営が主体であり、畑地が大きく卓越した地域であったと考えられる。

集落は、台地中央部にはほとんど無く、北側は海岸平野を望む地域(諸田、定留、是則など)、西側の沖代平野を望む地域(池永、永添など)、南側の犬丸川沖積地に面した地域(福島、伊藤田、犬丸など)に点在している。

今回、国道 212 号(中津道路)が通過するのは、台地の北東端部に近い犬丸から犬丸川の沖積地を望む伊藤田地区である。犬丸地区は、菅原道真が太宰府へ流される時、舟が嵐に遭い漂着した場所と言われており、現在犬丸天満社が鎮座する。現在は海岸線から約 2 km あまり入るが、昔は入り江状に海が入り込んでいたと言われ、現状では幅 50m ほどの谷が残されている。今回調査の対象となった田中地区は、下毛原台地の東を限る犬丸川によって形成された沖積地にあたり、伊藤田田中遺跡は犬丸川の作る自然堤防上の微高地に、屋敷田遺跡は犬丸川の旧河道による低地を中心とした地に立地している。

第2節 歴史的環境

下毛原台地周辺の旧石器時代の遺跡を見ると、台地から犬丸川を挟んで南側の丘陵にある伊藤田の才木遺跡でホルンフェルス製の剥片石器が出土していたのみであったが、212 号道路改良に伴う調査で田代遺跡において細石器等が出土しており、下毛原台地上にも旧石器時代遺跡があることが確認された。しかし、詳細については不明である。

縄文時代になると、田代遺跡と上畑成遺跡で早期の無文土器とそれに伴うと考えられる土坑が確認され、その他定留遺跡においても同様の無文土器が出土している。また、台地南端部の黒水遺跡では早期末から前期と想定される陥穴が 23 基発掘されている。陥穴は今回の中津日田道路関係の調査でも、台地上において確認されており、谷部(沖積地)を望む台地斜面部に立地するようである。このように、早期から前期にかけては台地上の平坦面には集落が、そして谷を望む斜面部では陥穴群が設けられていたと想定できる。

縄文時代後・晩期になると、下毛原台地の南側を流れる犬丸川流域において貝塚が出現する。中でも、福島にあるボウガキ貝塚、福島貝塚、植野にある植野貝塚などが、河岸段丘上に立地している。ボウガキ貝塚では、後期中葉の竪穴住居跡 3 基や土坑墓 4 基等が発掘調査されており、県指定史跡になっている。

弥生時代になると、下毛原台地の縁辺部で、上ノ原遺跡、福島遺跡や定留遺跡などが確認されているが、台地の東半を占める犬丸地区は遺跡の空白地帯であった。広い下毛原台地より、山から伸びてきた丘陵先端部などに立地する遺跡が目立つ。確かに、今まで空白であった犬丸地区を横切る今回の中津日田道路の調査でも、弥生時代に属する遺構は、田代遺跡で検出された貯蔵穴 1 基のみである。おそらく、台地の広い平坦面は利用されずに、沖積地を望む河岸段丘や丘陵部に集落が営まれていたものと想定できる。

古墳時代では、下毛原台地が山国川に直接接する相原において、前期から中期の古墳・横穴墓が集中的に築造される。しかし、これらの墳墓を造営した集団は山国川流域の沖積平野に集落を営んでいたと考えられており、実際当該期の大規模集落は下毛原台地西側では確認されていない。しかし、古墳時代後期になると、最近の調査で下毛原台地東側の犬丸から定留地区において集落が発掘調査されており、それらには蛸壺が伴うものが多く、

海との関係が想定される集落である。また、下毛原台地から犬丸川を挟んだ南側の伊藤田の丘陵先端部では須恵器産地が形成されており、工人居住集落も下毛原台地にあった可能性も考慮する必要がある。しかし、いずれにしても台地の広い平坦面ではなく、谷を望む台地縁辺に集落は築かれ、台地平坦面は畑地あるいは空地であったと考えられる。

古代には台地中央部を東西に官道が貫く。そして、その官道と一体的に沖積地には条里水田が開かれることになる。官道添いには相原廃寺、下毛郡衙、薦社などが配置される一方、台地上ではほとんど集落遺跡は確認されていない。しかし、上畑成遺跡で確認されたように、古代の開削になる水路が台地上に掘られており、ため池灌漑による水田の開発も行われていたのであろう。古代には台地南西部の標高の高い地点にある御澄池が築造されていたとされており、平野の条里に対応するように、台地上でも水田開発が進んでいたのである。

中世になると、台地上では水路が確認され、引き続き水田開発も行われていた。しかし、今見るような台地上の水田景観は、江戸時代に耶馬溪から山国川の水を引いた荒瀬井路の開削を待たねばならず、荒瀬井路以前の状況は、三角池の灌漑がどの程度であるかわからないが、基本的には谷頭に作られた個別小規模なため池灌漑に頼るものであったと思われる。平坦面には畑地が広がっていたのであろう。

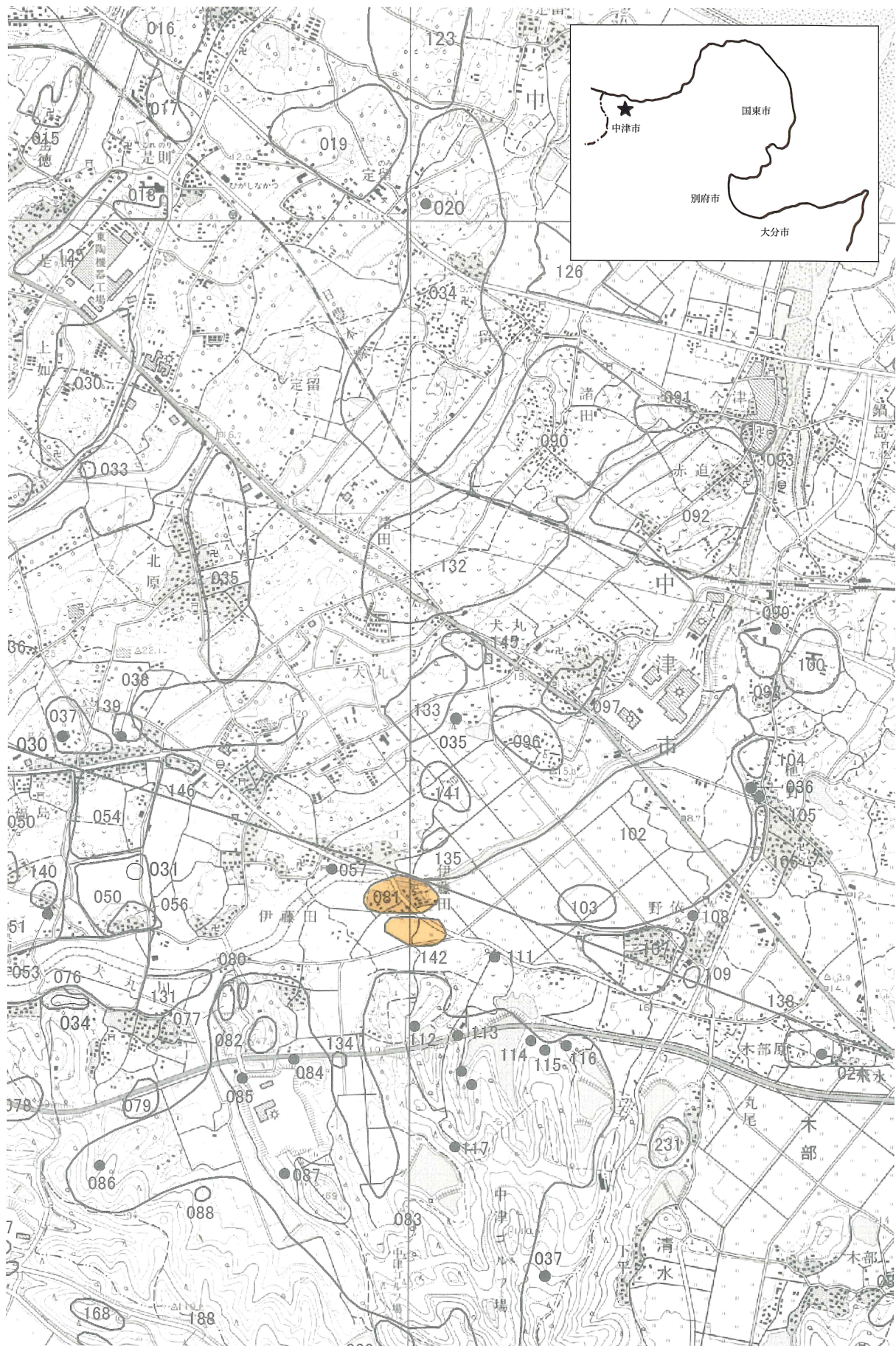
一方、集落は台地の縁辺部に点在する現在のような景観が中世後期には成立していたと想定される。それらの集落には在地領主が在村し、大小の館、あるいは城が集落の中に内包される形で存在した。中でも福島地区は福島城を中核として、周辺には町や館、堀を廻らせる大規模寺院が集中し、宇佐・下毛郡域でも群を抜く存在となる。その他、館が確認される集落は犬丸、諸田、定留などがあげられる。中津に隣接する宇佐郡では「宇佐郡三十六人衆」と呼ばれる在地領主がいるが、下毛郡域も同様な在地領主が点在したのであろう。

近世には下毛原台地は「中津藩」になり、前記した「荒瀬井路」の開削による水田化が推し進められることになる。

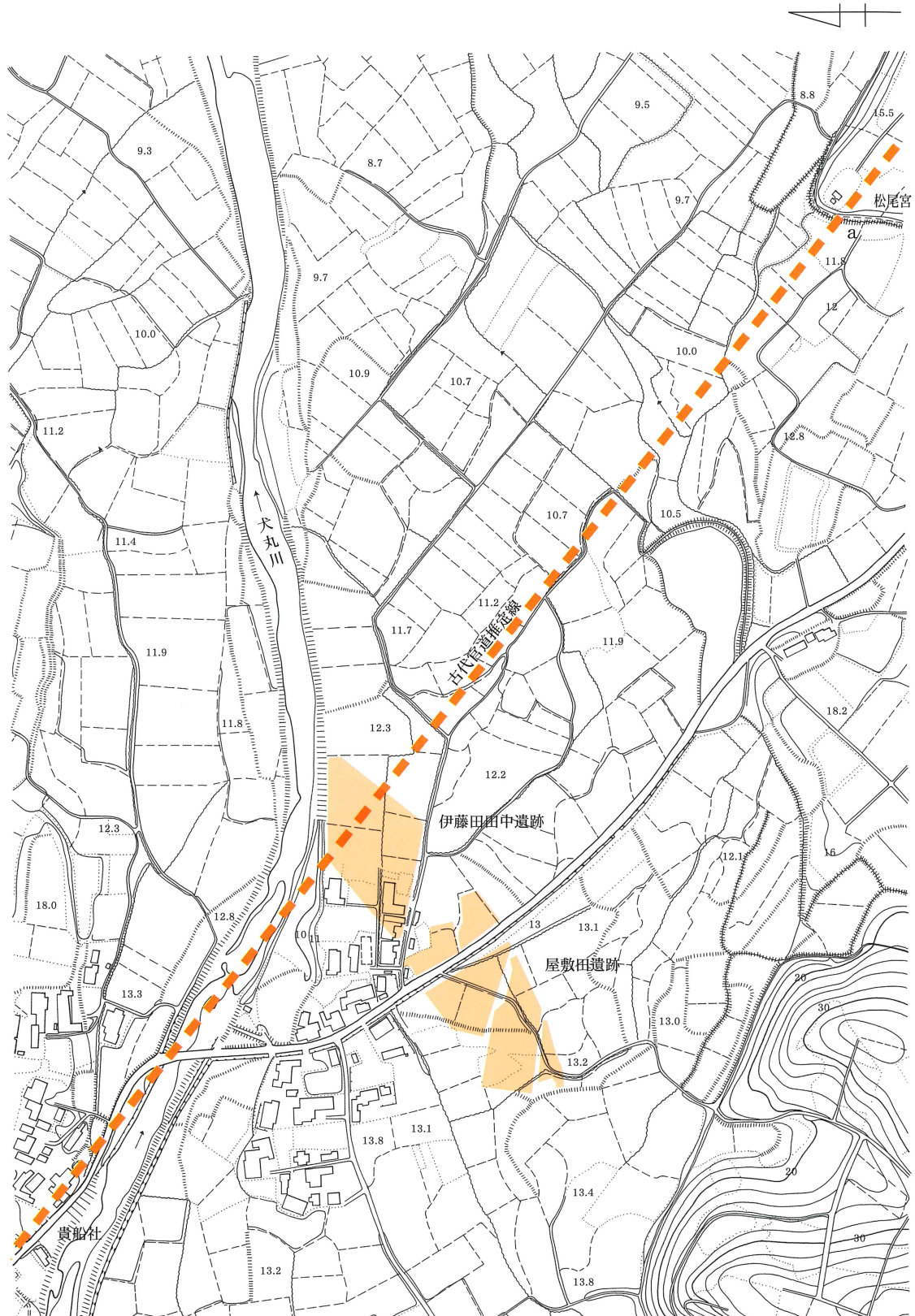
第1表 下毛原台地周辺の遺跡

※番号は第1図中の番号と同じ

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
015	全徳遺跡	弥生・古墳	085	城山窯跡	古墳	116	瓦ヶ迫窯跡	古墳
016	舞手橋東段上遺跡	弥生	086	洞ノ上窯跡	古墳	117	ホヤ池窯跡	古墳
017	是則遺跡	弥生・古墳	087	大谷窯跡	奈良	123	田尻大迫遺跡	古墳
018	安松遺跡	古墳・中世	088	才木遺跡	古代	125	舞手川流域遺跡	古墳・中世
019	是能遺跡	古墳	090	諸田遺跡	弥生・古墳・中世	126	天貝遺跡	縄文・古墳
020	和間貝塚	縄文	091	岩丸城跡	中世	132	諸田南遺跡	古墳・中世
024	六十塚遺跡	古墳	092	十前垣遺跡	古墳・中世	133	上畑成遺跡	縄文・中世
030	上如水遺跡	弥生・古墳	093	末広城跡	中世	134	伊藤田穂屋遺跡	古墳
031	中原遺跡	近世	096	中尾城跡	中世	135	馬下遺跡	古代・中世
033	原遺跡	古墳	097	犬丸城跡	中世	138	古代豊前道跡	古代
034	定留遺跡	弥生・古墳・中世	098	若旗遺跡	弥生・古墳	139	町居屋敷遺跡	中世
035	北原遺跡	弥生・古墳	099	若旗古墳	古墳	140	仮屋敷遺跡	中世
036	土木貝塚	縄文	100	中須遺跡	古代	141	北小枇杷遺跡	古墳
037	田丸城跡	中世	103	野依遺跡	弥生・古代	142	屋敷田遺跡	古代・中世
038	長久寺貝塚	縄文・中世	104	植野伽藍遺跡	弥生・古墳	145	田代遺跡	弥生・古墳・中世
050	福島遺跡	縄文・弥生・中世	105	植野貝塚	縄文	146	畑中遺跡	奈良・中世
054	三保遺跡	弥生・古墳	106	植野古城遺跡	弥生・古墳	168	三ツ塚古墳群	古墳
056	下伊藤田城跡	中世	107	松尾遺跡	弥生・古墳	188	大源寺横穴墓群	古墳
057	黒川古墳	古墳	108	野依古墳	古墳	231	清水城跡	中世
078	寺迫遺跡	古墳・古代	109	野依城跡	中世			
079	安平遺跡	中世	111	是則塚	中世			
080	城山横穴群	古墳	112	夜鳴池窯跡	古墳			
081	伊藤田中遺跡	古代・中世	113	踊ヶ迫窯跡	古墳			
083	野依・伊藤田窯跡群	古墳・古代	114	山田池窯跡	古墳			
084	草場窯跡	古墳	115	大池窯跡	古墳			



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 遺跡周辺の地形と調査箇所（昭和51年圃場整備前の状況）（1/5,000）

a地点には台地から下る堀り割りの道が残る。

第3章 伊藤田田中遺跡

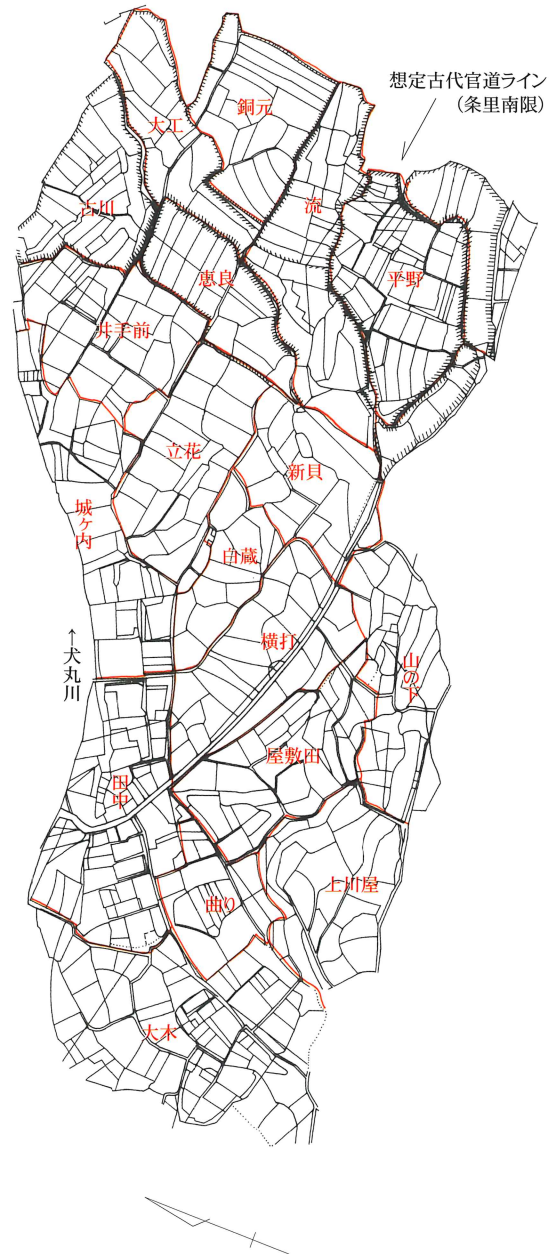
第1節 調査の概要

調査は、現在の「田中集落」の東の端を斜めに横切るように伸びる工事範囲で行われた。そのため、遺跡範囲のすべてが明らかになった訳ではない。しかしながら、後述のように現在の集落の地割りとある程度重なる形で遺構の展開が見られたので、遺跡そのものは現在の「田中集落」にほぼ重なる範囲に展開していたことが想定できる。そう考えられるとすると、調査対象となった範囲は、遺跡全体の1割程度ということになる。

調査では、大まかには古代と中世の2時期の遺構が確認された。古代については、道路跡(連続土坑)と溝跡(水路)、さらには製鉄炉跡が確認された。これらは時期を示す遺物が少なく時期比定が難しいが、三者は有機的な関連のもとで展開された遺構群であると想定される。それは、遺跡の北東部に展開する「野依条里」の南限が「宇佐大路」に比定され、この道に沿って水路が想定できることから、遺跡で確認された道路跡と水路がそれぞれ「宇佐大路」と条里に掛かる水路と考えられ、さらに「宇佐大路」の犬丸川渡河点という要地で製鉄が行われたと考えられるからである。古代の製鉄炉は大分県内では初の検出で、送風管を持つ横置き^{のよ}の長方形箱形炉である。

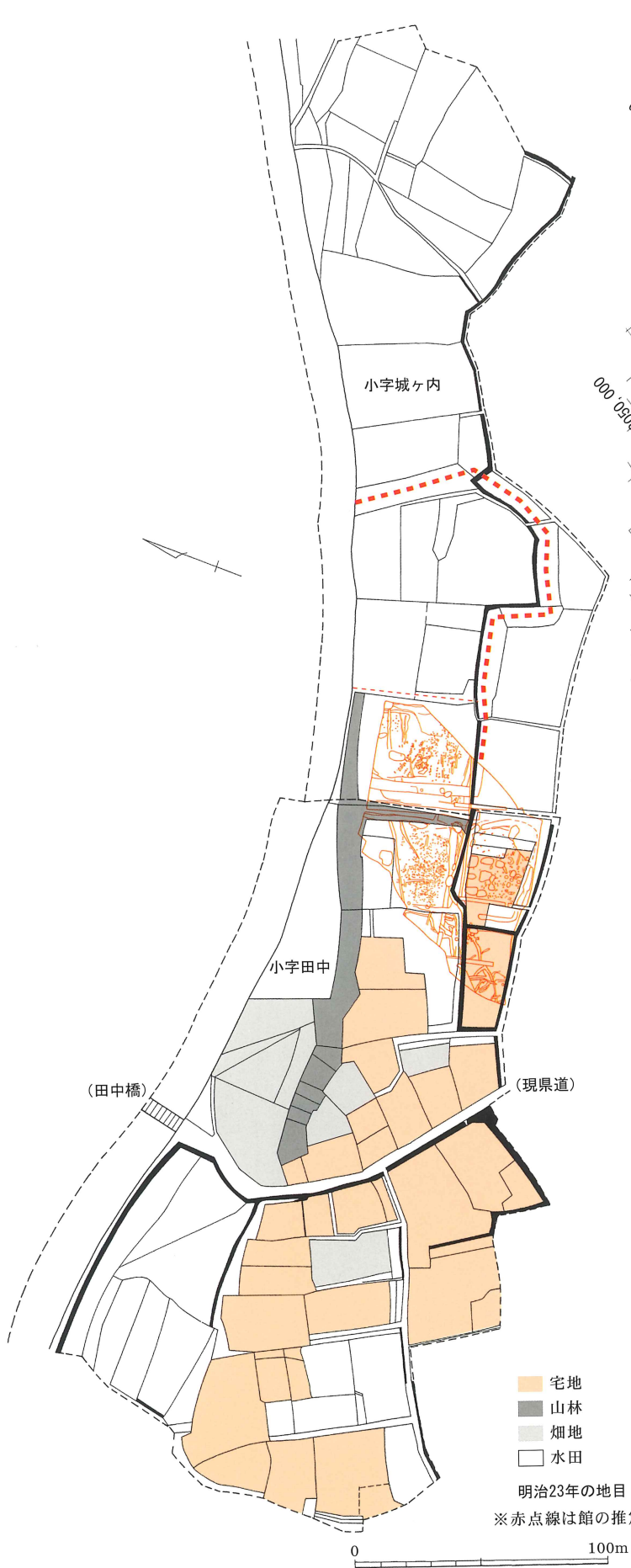
中世は、小字で「城ヶ内*¹」と呼ばれる中に収まる形で館が、そしてその西側に展開する形で屋敷区画が検出された。これらの遺構群は現在の集落とほぼ重なっている。つまり、現在の集落につながる、その萌芽が見られたのが中世ということになる。館は、幅約5mの堀が巡る。堀は約50m直線で略南北方向に伸びた後、東に直角に曲がり調査区外に伸びるが、全体の形状・大きさは圃場整備前の地割りから二通りの復元案が考えられる。一つは50m四方で方形に収まるもの(第4図の赤細点線)、もう一つは折れを有しながら東方に約130m伸びるというものである(第4図の赤太点線)。後者の方が四倍弱面積が広くなることになる。館内部では建物が2カ所で見られ、それぞれ1度の建て替えが認められた。さらに、堀には土器が幾度も大量廃棄されており、その数は完形近くに復元できたものだけで1,000点を優に超える。しかしながらほとんど型式差は無く、1度の建て替えと合わせ考えると、13世紀後半から14世紀初頭の中で収まる存続期間が想定できる。

一方、館の西側に展開する集落は、その初現が不明瞭ではあるものの、確実に15世紀から16世紀代には存在している。調査ではB区からE区の4区画が確認され、その内E区が水田で、中世段階では一度も屋敷になっていなかった。残りの3区画は、D区の大部分が調査区外で不明ではあるが、中世段階ではいずれも屋敷区画と考えられる。特にB区は柱穴が密集しており、複数回の建て替えが想定できる。

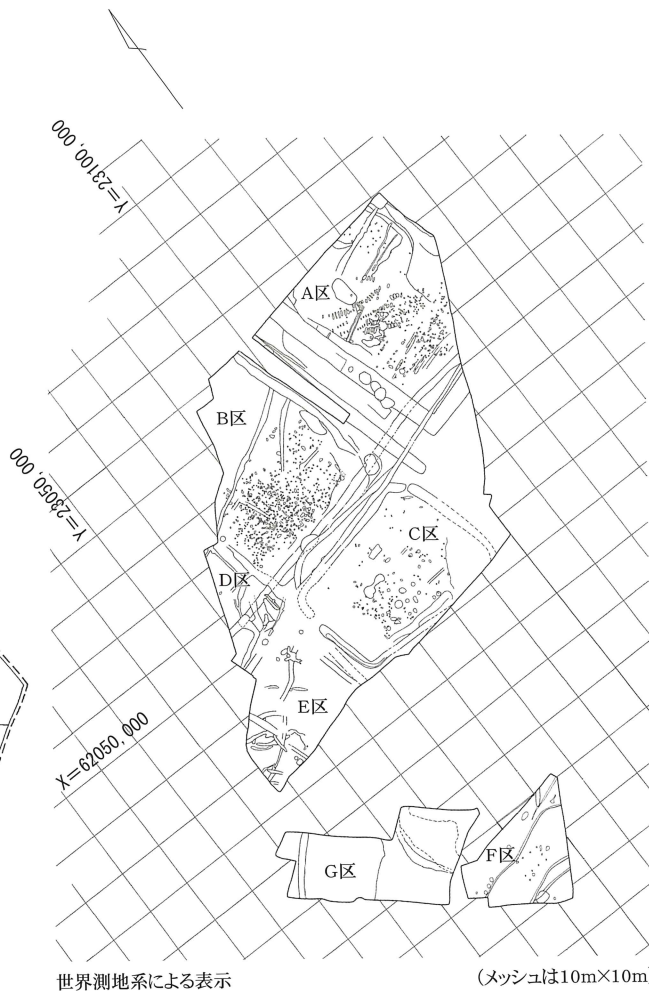


第3図 遺跡周辺の小字集成図(明治23年調製)
(1/1,000)

*¹ 地元では「ジョウガウチ」あるいは「ジョウガブチ」と呼んでいる。



第4図 旧字図による田中集落部分の地割りと遺構



第5図 調査区配置図

※明治23年に調製された旧字図(第3図)を見ると、小字田中の南側にある小字横打の中を通る県道は、筆を分筆しており、道そのものの新しさを感じる。建設年代は明らかでないが、小字田中における道路の自然さとは対照的であり、本来道は小字田中の南側、即ち横打との境を通り東進し、小字横打と白蔵との境、あるいは白蔵と立花との境を通して南東に進んでいた可能性がある。そして少なくとも図版14にみる絵図の段階(慶応3年)では、既に現県道のラインになっていたようである。

また、これらの館や屋敷以外の地では水田跡が確認されている。第4章で触れる屋敷田遺跡から続く浅い谷水田がG区で確認されている。この水田は館存続期間とほぼ等しいと考えられ、さらにその水田の下から10世紀前後の水路が検出されている。先に述べた古代の水路が廃絶した後、条里に給水する水路として新たに掘削されたものであろう。



第6図 A区～E区遺構配置図

第2節 遺構と遺物

1) 各区の概要

先ず、AからG区に分けて調査を行った関係上、便宜的なものではあるが、各区ごとに概要を記した後に、時期別にまとめて報告を行う。

a A区 (第7図)

A区は調査区の最も東側に位置し、小字「城ヶ内」の西端にあたる。B区との境は小字「田中」との小字境で設定したが、丁度境から溝(第2号堀)が検出された。そこで、それも含めてA区を概観すると、A区は堀で囲まれた「館」と考えられる遺構にほぼ重なる。この館が、小字「城ヶ内」の「城」にあたる可能性は高い。

「館」の西側を画する溝は二重となっているが、外側の堀(第2号堀)は内側の堀(第1号堀)が折れる部分で終わっている。堀で囲まれた内部からは、切り合いがあるものの、掘立柱建物7棟(内1棟は礎板あり)、井戸1基、廃棄土坑1基が検出された。これらは、いずれも13世紀後半～14世紀初頭のものである。さらに、第2号堀の南北方向の1辺は、一度埋められた後、北よりの部分は耕作地(畑地か?)になり、南よりの部分は土器・瓦器の廃棄土坑が複数掘られており、大量の遺物が出土した。

また、これらの「館」遺構に重なって、北西から南東に向けて長楕円形の土坑が、長軸方向を平行にして連続して複数掘られているのが確認された。これらは、「道」の痕跡であると考えられるが、「館」とは軸を異にしており、「館」以前か以後なのかが問題となったが、他の遺構から考えて、古代のものであると想定された。また、南端に近い部分では、東西方向に古代の溝(第1号溝…SD-5)が検出された。この溝はB区やD区を貫いてほぼ直線的に伸びるが、このA区ではやや南側に湾曲するようになる。

以上、A区では性格、時期を異にする2面の遺構が展開していた。

b B区 (第8図)

A区の西側に接する部分で、小字「田中」の東端部に位置する。A区との境は、A区の館遺構の外堀(第2号堀)の西側に平行するように溝(第8号溝…SD-3、6)がある。この溝は、調査区南東部で溜井状になり、そこから西側に折れているのが確認されたが、上部の削平により、それ以上は追えなかった。逆にD区との境は、浅い溝(第9号溝…SD-010)があり、この溝も南西部で東側に折れると考えられるが、上部の削平によりそれ以上は追えなかった。しかし、第8号溝と第9号溝が同一のものであるとすると、B区は浅い溝で囲まれた区画(北側は不明)であるとする事が出来る。その溝で囲まれた内部からは多数の柱穴が検出されている。これらから4棟の掘立柱建物が復元できたが、実際はさらに多くの切り合う建物跡がある可能性が高い。これらの多くは中世後半期のものであると考えられる。

また、これらの区画とは方位を異にする溝が四条検出された。一つはA区に繋がる第1号溝(SD-5)で、あとは第2号溝(SD-2)、第10号溝(SD-1)、第11号溝(SD-4)である。このうち、第1号溝と第2号溝は古代、第10号溝と第11号溝は中世と考えられる。

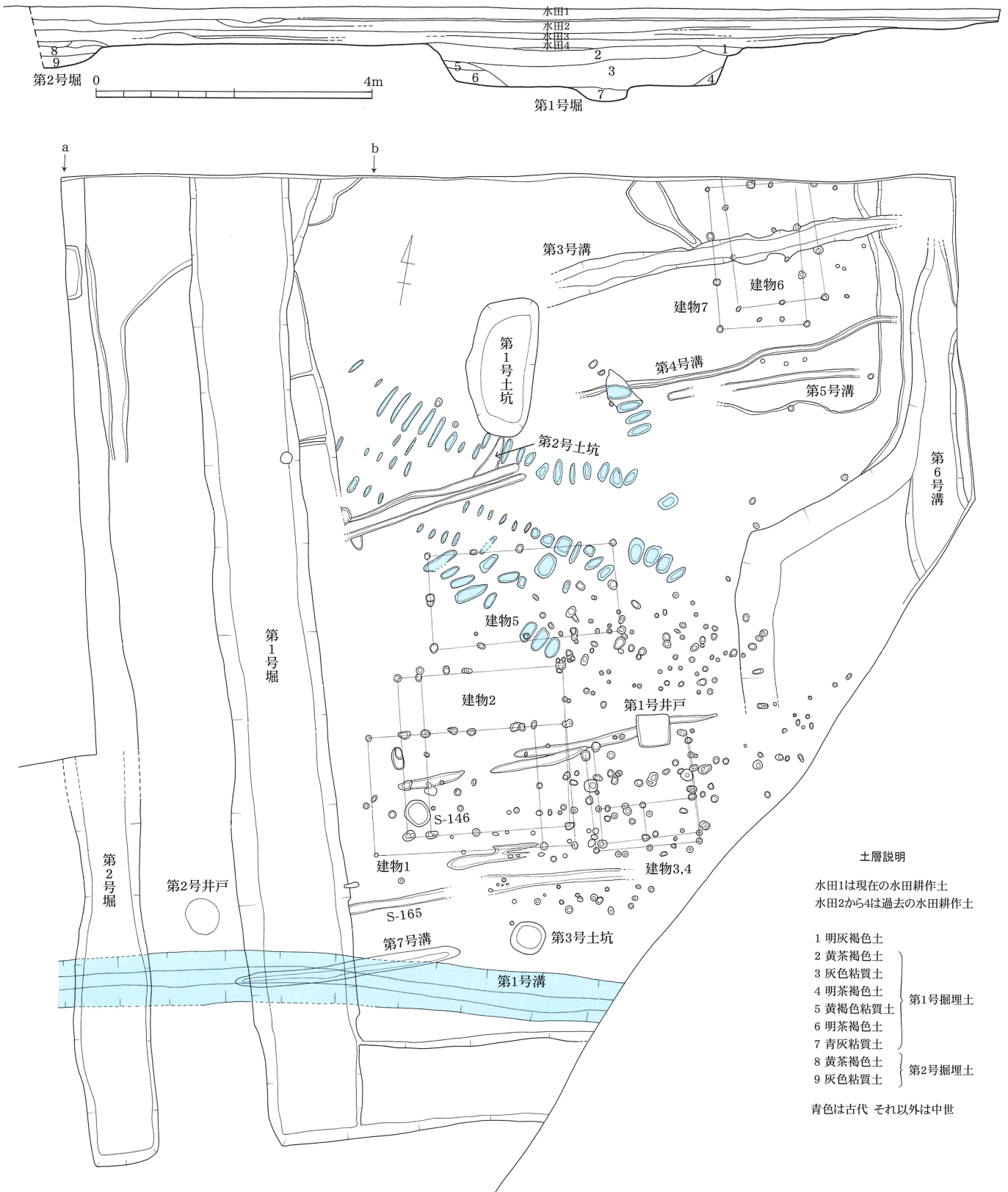
c C区 (第9図)

C区は、B区の南に接する区画で、調査前までは家屋があった。そのため、明治以降の廃棄土坑(攪乱として処理)が多く、遺構の把握は完全にはできなかった。B区との境は、調査前は溝(SD-1001)や道であったが、調査によって浅い溝(第13号溝…S-105)が確認された。この溝は、東側で一度陸橋部を作り、南北方向の溝に繋がるが、調査区南東部で不明瞭となる。これは、C区の南東部の地山が、後の水田化によってグライ化していることが影響している。南側は溝(第12号溝…S-111)が、西側にも溝(第12号溝…S-109)があり、これらの溝は一体としてこのC区を囲っていたと思われる。内部からは1棟の掘立柱建物を復元できた。これらは中世後半期のものである。

また、このC区からは鉄アレイ形を呈する製鉄炉が検出された。時期を示す遺物はなかったが、形状から古代のものであり、溝で囲まれた区画とは時期が異なる。

-13.000m a A区北壁

b



第7図 A区遺構配置図 (1/250)

0 5 10m



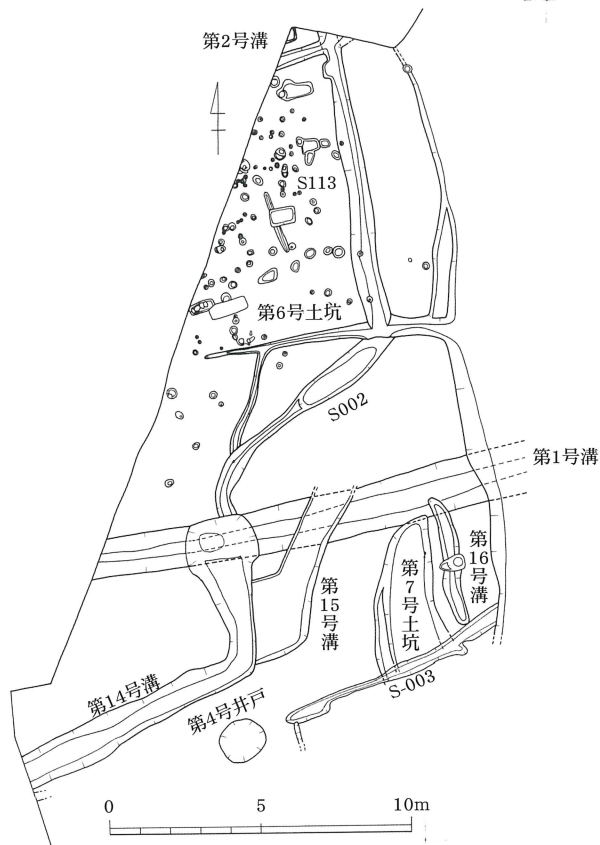
第8図 B区遺構配置図 (1/250)



第9図 C区遺構配置図 (1/250)

d D区(第10図)

D区はB区の西側にあたるが、B区との境は約10cmの段差が付き(D区の方が高い)、E区との間には調査前は道があった。D区はB区やC区と同様、何らかの区画があり、その南東角部を一部調査したということになる。溝や柱穴も確認されたが、調査が一部分であったことから、全体の状況は不明である。しかし、この区画の南東部分には溝が集中するが、区画の内部よりの部分には柱穴や土坑があるのみであり、この部分から調査区外にかけて、建物が広がっていたことが推測される。これらは中世後半期と考えられる。

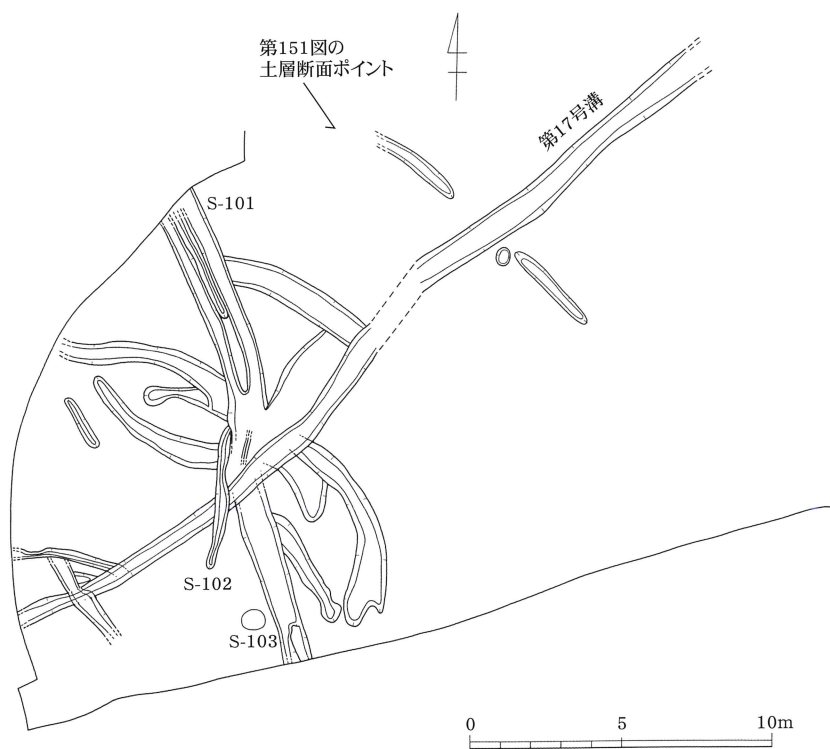


第10図 D区遺構配置図 (1/250)

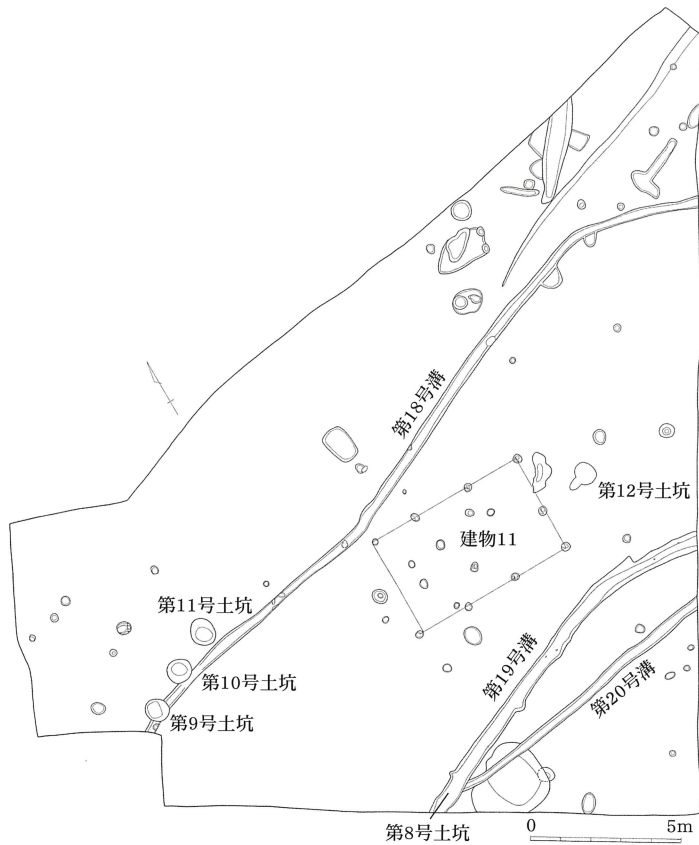
e E区(第11図)

E区は、AからD区と様相が全く異なり、建物跡は検出されていない。回りを画するような溝はなく、水田に伴うと考えられる縦横に伸びる溝が検出された。この内に中世に遡るものは第17号溝(S-001)で、この溝を境にして南側には水田が広がっていたと考えられる。

この第17号溝と方位の異なる他の溝は、いずれも近世以降のものと考えられる。



第11図 E区遺構配置図 (1/250)



第12図 F区遺構配置図 (1/250)

f F区(第12図)

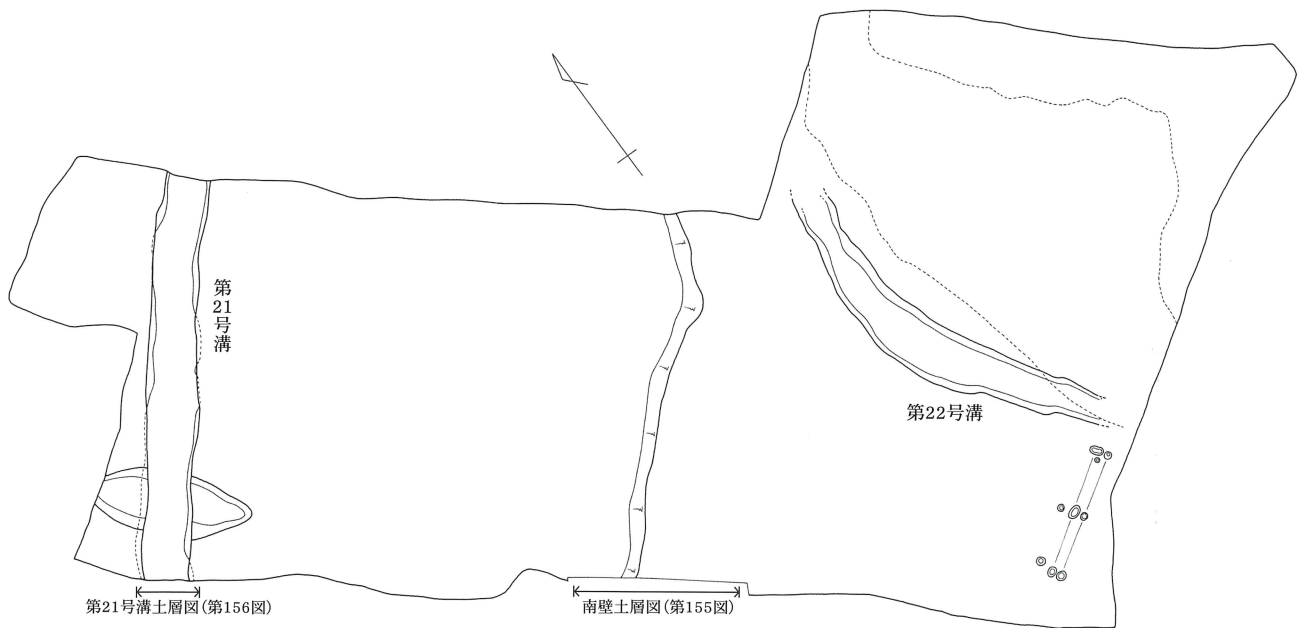
前年度に西側に接するG区の本調査を行い、掘立柱建物の一部と思われる柱穴群が検出されていたため、この建物に関連する遺構が検出することが見込まれていた。

表土剥ぎの結果、南東方向に走る3条の溝と2×3間の掘立柱建物1棟、焼土や礫とともに輸入中国銭を供伴する土坑、その他遺物を伴う小土坑が4基検出された。G区において確認された柱穴群に関連する遺構は今回の調査では検出されなかった。

(江田)

g G区(第13図)

G区は、現県道に面した水田であった場所である。調査の結果、調査区西側で、南西から北東に向けて延びる溝(第21号溝…S-003)が検出された。この溝は県道を挟んで調査を行った屋敷田遺跡(第4章)の溝(SD-1)と同様の形状を呈し、位置関係からも同一の溝と判断できる。この溝の上部には水田層が広がり、その広がりには調査区中程までであった。すなわち調査区東半分は礫を含む地山が露出し、F区に見るように建物も建つ「場」であった。



第13図 G区遺構配置図 (1/250)

2) 古代

古代に属する遺構はAからD区を東西に貫く溝(水路)、A区中央で確認された道路跡を示す連続不定形土坑、そして、C区で確認された製鉄炉 1 基である。いずれからも時期を明確に特定出来る遺物が出土しなかったが、製鉄炉の形状や僅かに出土した溝(水路)内遺物などから、時期を古代に比定した。なお、A～C区では多数の柱穴が検出されたが、確実に古代に属する建物は確認できなかった。

a 道路跡(第14,15図)

連続する不定形土坑がA区で確認された。波板状の連続土坑はほぼ同じ地点で11条以上ある。第14図からわかるように、土坑相互の切り合いはほとんど無く、方向はほぼ $N-70^{\circ}-75^{\circ}-W$ である。しかし、土坑列1だけは $N-33^{\circ}-W$ と角度が振れている。いずれの土坑の中からも木痕跡や砂利、遺物の出土はない。埋土はやや粘質のある灰褐色土で、上面では土坑を覆い隠すように広がりを見せていた。その範囲はほぼ土坑の分布する部分の東側



第14図 A区連続不定形土坑(道路跡) (1/100)

半分に重なっており、その部分が道路敷であるとする、幅は約10mとなる。側溝が確認されなかったため、同一時期に利用されていた道幅は不明であるが、この地点が犬丸川の渡河点にあたることを考えれば、渡河する地点の変動に伴って、最終的な接続部分の道路方向も定まった可能性が高い。それを示すものが、やや方向を異にする土坑列1であろう。土坑列1はほぼ犬丸川に直交する方向となるので、ある段階で遺跡のすぐ北側が渡河点であったことを示すものであろう。

大部分の土坑列が示すN-70°-W前後という方向は、古代官道である豊前道(いわゆる「勅使街道」あるいは「宇佐大路」とほぼ一致する。そして、検出された遺構は、「宇佐大路」の復元的調査の報告書*1で示

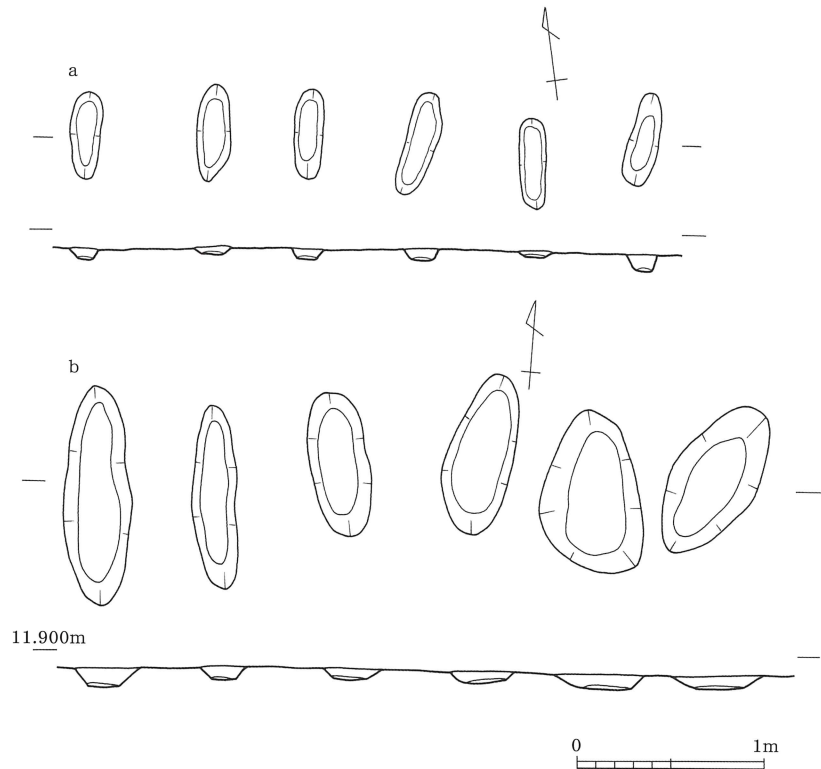
された想定ラインに重なるのである。さらに周辺を細かく見ると、遺跡の東約600mには丘陵から平野に下る堀割が残り、そこから圃場整備前の農道(やや南北に揺らぎがあるが)を結んだ延長線上に、伊藤田田中遺跡の道路遺構があるのであるのがわかる(第2図参照)。そして、この直線は犬丸川対岸の橋のたもとを通過して、福島地区に現在も残る直線的な地割りに重なるのである*2。よって、伊藤田田中遺跡で確認された道路跡は、豊前道であることができるのである。

b 製鉄炉跡

遺構(第16図)

道路遺構から約100m南西に離れた地点で見つかった長方形箱形炉である。排滓場(排滓坑)を含めた全長は2.35m(復元)で、平面形は鉄アレイ形をなす。製鉄炉下部の被熱を受けた部分は長方形で、長さ0.62m、幅0.2m、深さは5~6cmである。被熱部はその両側に掘られた排滓坑の炉寄りの壁にも及ぶ(図の朱色部分)。排滓坑は東側のもの(以下、東排滓坑)が1.0×0.9mのややいびつな楕円形を呈し、床面は2段掘りになって、一番深いところで15cmである。内側の掘り込み(2段目)の炉本体側のみ火熱を受け赤変していることを勘案すると、炉構築時の掘り込みが内側のもので、外側のもの(1段目)は後ほど掘り直されたものと考えられる。北側は一部後世の攪乱により破壊されている。床面には炉本体側が赤変した川原石が据えられており*3、排滓坑内で鉄塊の取り出し作業を行ったことが推測される。西側のもの(以下、西排滓坑)は1.0×0.6mで、深さは15cmである。西排滓坑は新しい土坑(S-126)に一部切られている。

土層断面図に見るように、東排滓坑では、中央部に炉を壊した際の堆積物と思われる滓混じりのオレンジ色のブロックを含む茶褐色土が堆積し、その上部には、炉下部の掘り込みから続く、焼土ブロックを含む炭混じりの黒色土が広がり、さらにその上に炉壁や滓が堆積している状況が観察された。



第15図 A区連続不定形土坑(1/40)

*1 『宇佐大路-宇佐への道調査-』大分県文化財調査報告 第87輯 大分県教育委員会 1991

*2 この直線道の一部については、県道の改築工事に伴い平成21年度に調査(丁ノ坪遺跡)が行われる。

*3 不注意にも取り上げた石の所在が不明で、正確な大きさ、重さ等がわからない。

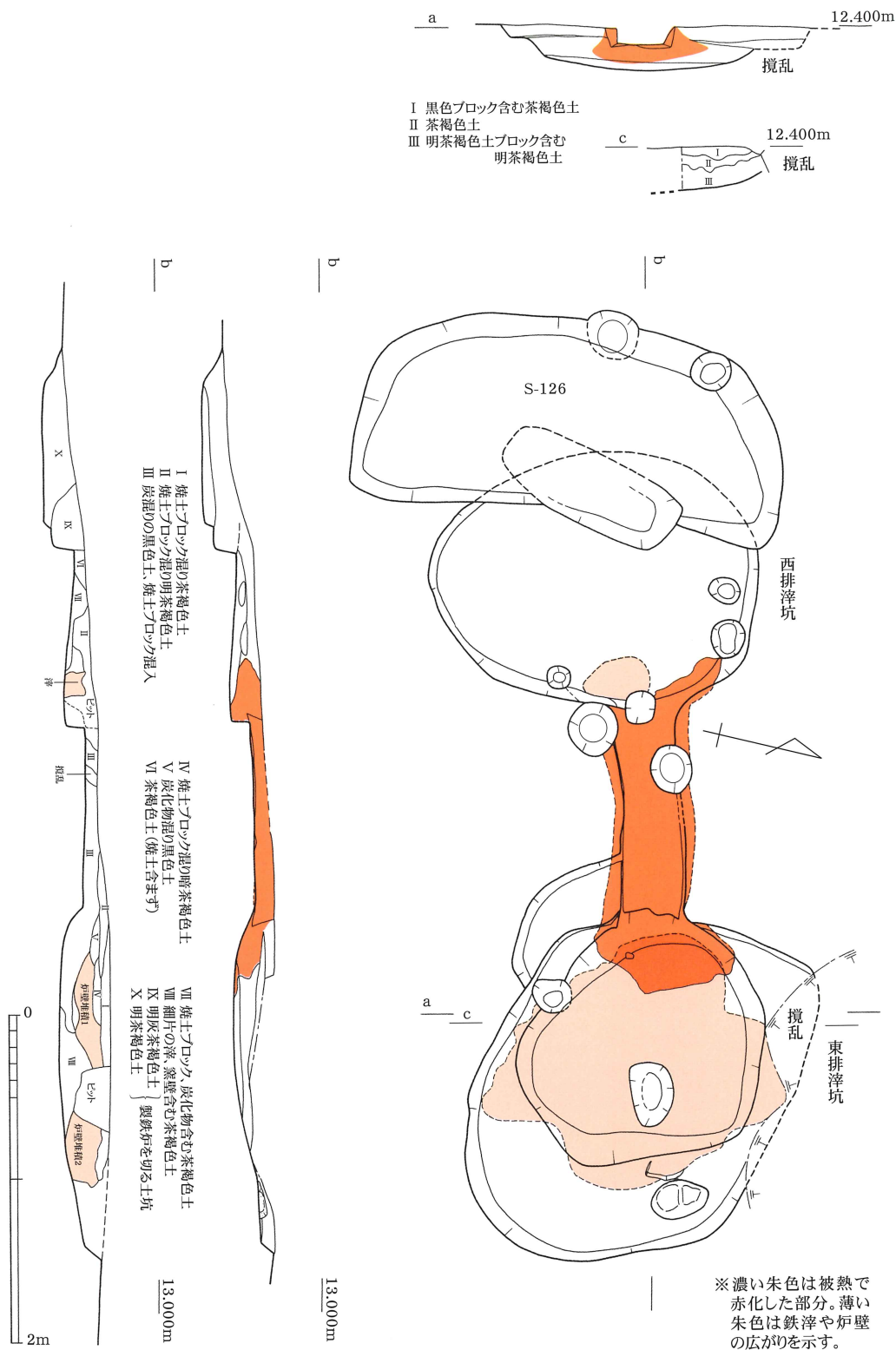
なお、「ふいご」の設置された痕跡などは検出されなかった。炉の形状や土製の送風管の存在から、8世紀代前後に位置づけられるものであろう。

また、後述(第5章第1節)のように、炉跡出土の木炭の放射性炭素年代測定(AMS法)によると、2点とも7世紀第3四半期を中心とする時期に位置づけられる。このことは、福岡県域ではあるが最も近い松丸F遺跡の箱形炉が放射性年代測定や熱残留磁気による地磁気年代、出土遺物などにより7世紀代と考えられていることと矛盾はなく、製鉄炉に係わると考えられる国東で発見されている横口式木炭窯も7世紀後半に位置づけられていることからすれば、今のところ木炭の年代(AMS)である7世紀第3四半期前後に位置づけておきたい。また、今回の遺跡内では7世紀代の須恵器(高坏脚部のみで、年代の絞り込みが不可能)が確認されていることも、傍証の一つにはなる。

遺物(第17~25図)

遺物は、西排滓坑、東排滓坑、炉本体から、炉壁や鉄滓、炉底塊など重量にして合計135.5kg出土している。内訳は、粉状の炉壁や鉄滓が50.6kg(37.3%)、炉内滓が23.0kg(17.0%)、炉壁が14.7kg(10.8%)、炉内流動滓が11.3kg(8.3%)、炉底塊が10.5kg(7.7%)、流出溝滓が6.7kg(5.0%)、マグネタイト系遺物が5.9kg(4.3%)、流動滓が5.3kg(3.9%)、流出孔滓が4.5kg(3.3%)、砂鉄焼結塊が1.9kg(1.4%)、送風管破片(重量にして56g)、たたき石1個、工具付着滓2.9g、木炭7.2g、原料砂鉄が出土している。なお、調査現場において、木炭片や砂鉄について全量採取出来てはいない。

総量135.5kgの遺物の内、報告書に掲載した資料は粉状の資料を除く1,391点の中の8.6%にあたる119点(重量にして18.1kg、13.4%)である。出土した遺物の種類はすべて網羅しており、全体の傾向はわかる資料となっている。



第16図 C区製鉄炉跡実測図

第2表からわかるように、全遺物 135.5kg の内、約 70% が東排滓坑から出土している。内訳を見ると、半数を占める鉄滓・炉壁粉混在を除くと、炉内滓、炉壁、炉内流動滓の順に多く、これらが 7 割近くを占める。一方、西排滓坑の遺物量は全体の 25% である。この内、炉内滓、炉壁、炉内流動滓が多いのは東排滓坑と同様であるが、西排滓坑では炉底塊が多いことが注意される。これは、炉底塊取り出し後の、作業状況を示すものであろう。

なお、製鉄関係遺物の理化学的分析の結果については、第5章第2節を参照のこと。




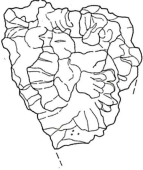

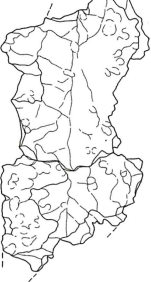



















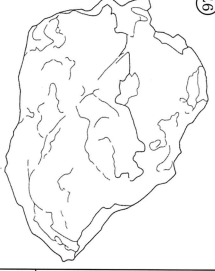





















次に、遺物について説明する。第17図1から24は炉壁である。この内1から18が長軸側で、19から24が短軸側である。長軸側の内、10から18が通風孔周辺のものであるが、通風孔そのものが残存した破片は確認できなかった。短軸側コーナー付近の22から24も通風孔周辺、または通風孔下の炉壁である。25から27は送風管の破片である。数は少ないが、この製鉄炉の送風には、土製の送風管が使われたことがわかる資料である。38から47は砂鉄焼結塊で、その内41から47にはマグネタイト系滓が付着する。48から50はマグネタイト系滓、51から53は炉内流動滓である。54から57は工具付着滓で、その断面形から工具は断面方形または隅丸方形のものが想定される。57から67は流出孔滓で、63から67には工具痕が認められる。68から73は流出溝滓で、74から78は流動滓。79から97は炉底塊で、86から88は工具痕付き、94から97には流出孔滓が付着する。88と92、93は含鉄。98から113は炉内滓で、107から113は含鉄である。114から118は木炭、119はたたき石である。なお、これらの遺物の詳細は、32頁の第3表(穴澤義功氏作成)以降を参照願いたい。

第2表 製鉄関連遺物遺構別集計表

遺物名 遺構名	遺物名															合計(g)
	1 炉壁	2 砂鉄 焼結塊	3 マグネ タイト系 遺物	4 炉内 流動滓	5 工具 付着滓	6 流出 孔滓	7 流出 溝滓	8 流動 滓	9 炉底 塊	10 炉内 滓	11 木炭	12 送風 管	13 たた き石	鉄滓・炉 壁粉混 在		
東土坑	重量(g)	12,572.2	1,162.5	3,735.6	7,051.5	0.5	3,135.3	6,049.5	3,334.9	2,265.2	12,441.2	0.3	501.0	0.0	38,756.0	91,005.7
	遺構中比率(%)	13.81%	1.28%	4.10%	7.75%	0.001%	3.45%	6.65%	3.66%	2.49%	13.67%	0.00%	0.55%	0.00%	42.59%	100.00%
	全遺物中比率(%)	9.28%	0.86%	2.76%	5.20%	0.000%	2.31%	4.46%	2.46%	1.67%	9.18%	0.00%	0.37%	0.00%	28.59%	67.14%
西土坑	重量(g)	1,742.8	724.9	1,686.4	3,608.0	2.4	1,397.7	650.8	1,672.1	7,891.0	9,129.7	5.8	50.9	588.3	9,254.7	38,405.5
	遺構中比率(%)	4.54%	1.89%	4.39%	9.39%	0.01%	3.64%	1.69%	4.35%	20.55%	23.77%	0.02%	0.13%	1.53%	24.10%	100.00%
	全遺物中比率(%)	1.29%	0.53%	1.24%	2.66%	0.002%	1.03%	0.48%	1.23%	5.82%	6.74%	0.00%	0.04%	0.43%	6.83%	28.33%
炉本体	重量(g)	318.2	49.7	430.0	549.6	0.0	0.0	48.8	269.5	315.4	1,262.0	1.1	0.0	0.0	2,550.0	5,794.3
	遺構中比率(%)	5.49%	0.86%	7.42%	9.49%	0.00%	0.00%	0.84%	4.65%	5.44%	21.78%	0.02%	0.00%	0.00%	44.01%	100.00%
	全遺物中比率(%)	0.23%	0.04%	0.32%	0.41%	0.00%	0.00%	0.04%	0.20%	0.23%	0.93%	0.00%	0.00%	0.00%	1.88%	4.27%
その他	重量(g)	55.6	0.0	11.7	81.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	188.3	0.0	0.0	0.0	0.0	336.9
	遺構中比率(%)	16.50%	0.00%	3.47%	24.13%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	55.89%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
	全遺物中比率(%)	0.04%	0.00%	0.01%	0.06%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.14%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.25%
合計(g)	14,688.8	1,937.1	5,863.7	11,290.4	2.9	4,533.0	6,749.1	5,276.5	10,471.6	23,021.2	7.2	551.9	588.3	50,560.7	135,542.4	
全遺物中比率(%)	10.8%	1.4%	4.3%	8.3%	0.0%	3.3%	5.0%	3.9%	7.7%	17.0%	0.0%	0.4%	0.4%	37.3%	100.0%	

遺物名 部位	炉壁(長軸側)			炉壁 (短軸側コーナー部)	送风管	砂鉄 (自然丸山採取)	砂鉄焼結塊 (含鉄)	砂鉄焼結塊 (含鉄)	炉内流動滓	流出孔滓	流出孔滓 (工具痕付き)
	1	2	3								
上段 上半 被熱 酸化	1	2	3	19	25	28 ※分析資料No.2	33	34	50	57	63
上段 下半 発飽 砂鉄 焼結	4	5	6	20		34 砂鉄(遺跡)	34	40	51	58	64
中段 上半 滓化弱	7	8	9	21	26	35	35	41	52	59	65
下段 上半 通風孔上 滓化強	10	11	12	22		36	36	42	53	60	66
下段 上半 通風孔周辺	13	14	15	23	27	37	37	43	54	61	67
下段 下半 通風孔下 滓付き	16	17	18	24		38	38	44	55	62	
分析				1 (No.1)		32	39	45	56		
						32	40	46	57		
						32	41	47	58		
						32	42	48	59		
						32	43	49	60		
						32	44	50	61		
						32	45	51	62		
						32	46	52	63		
						32	47	53	64		
						32	48	54	65		
						32	49	55	66		
						32	50	56	67		
						32	51	57	68		
						32	52	58	69		
						32	53	59	70		
						32	54	60	71		
						32	55	61	72		
						32	56	62	73		
						32	57	63	74		
						32	58	64	75		
						32	59	65	76		
						32	60	66	77		
						32	61	67	78		
						32	62	68	79		
						32	63	69	80		
						32	64	70	81		
						32	65	71	82		
						32	66	72	83		
						32	67	73	84		
						32	68	74	85		
						32	69	75	86		
						32	70	76	87		
						32	71	77	88		
						32	72	78	89		
						32	73	79	90		
						32	74	80	91		
						32	75	81	92		
						32	76	82	93		
						32	77	83	94		
						32	78	84	95		
						32	79	85	96		
						32	80	86	97		
						32	81	87	98		
						32	82	88	99		
						32	83	89	100		

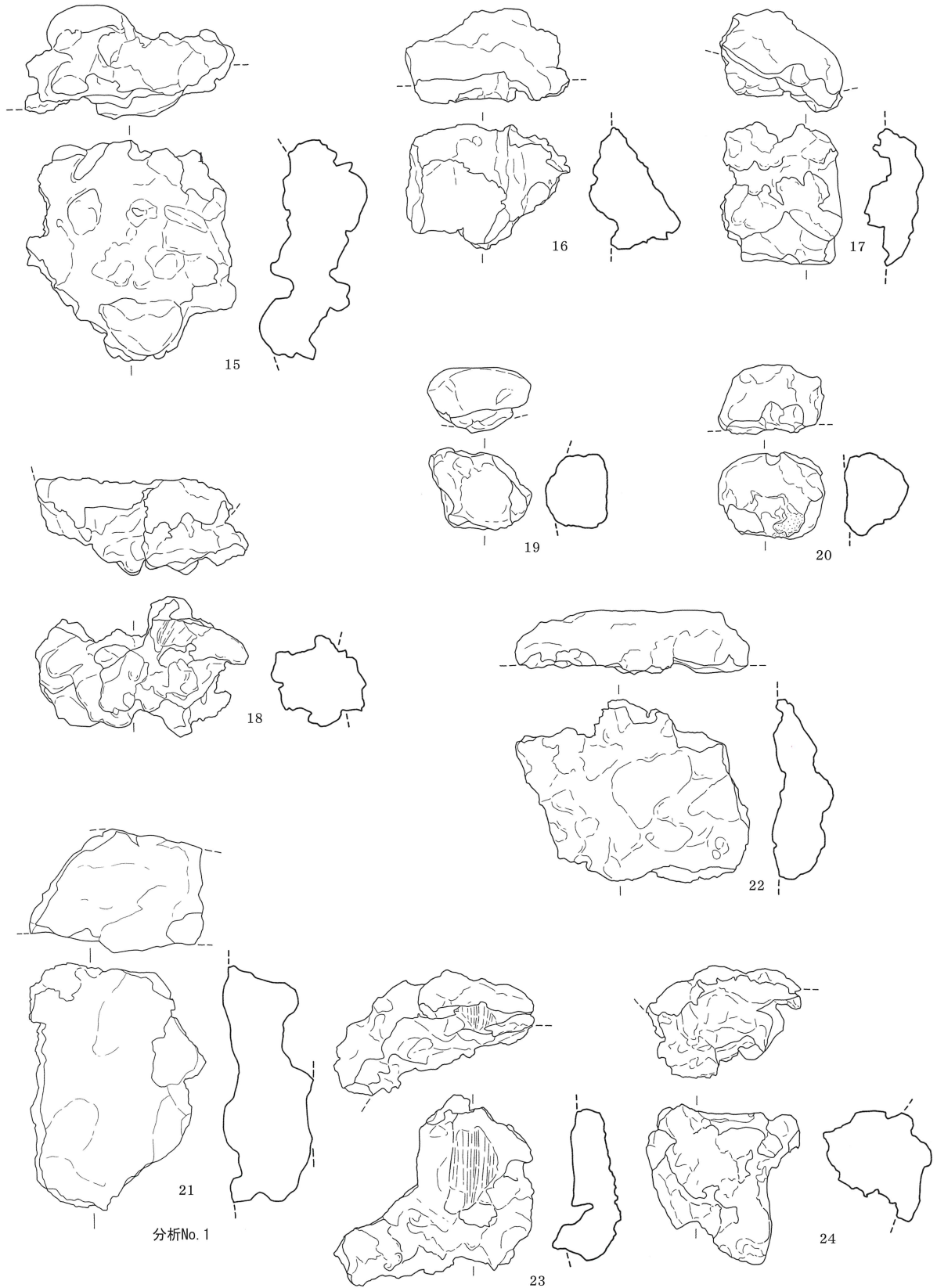
第17図 製鉄関連遺物構成図(1)

流出溝滓	流動滓	炉底塊	炉底塊 (砂鉄塊塊塊 マグネサイト系 滓付き) (工具痕付き 炉壁付き)	炉底塊 (含鉄)	炉内滓	炉内滓 (炉床土付き)	H(O)	木炭 (1/3)	たたき石 (ハンマーストーン)
     <small>※分析資料No.6</small>  <small>※分析資料No.6</small>	  <small>※分析資料No.7</small>   	   <small>炉底塊 (炉床土付き)</small>  	 <small>炉底塊 (工具痕付き 含鉄)</small>    <small>炉底塊 (工具痕付き 含鉄)</small>  <small>H(O)</small>	 <small>H(O)</small>  <small>炉底塊～流出孔滓</small>  <small>炉底塊 (流出孔滓付き)</small>  	     <small>炉底塊 砂鉄塊塊塊 (マグネサイト系 滓付き 含鉄)</small>     <small>M(O)</small>  <small>炉内滓 (含鉄)</small>  <small>錆化(△)</small>	 <small>※分析資料No.10</small>  <small>※分析資料No.11</small>  <small>※分析資料No.12</small>  <small>※分析資料No.13</small>  <small>※C14年代 測定用</small>	 <small>※分析資料 No.14.1</small>  <small>※分析資料 No.14.2</small>  <small>※分析資料 No.14.3</small> 	 <small>1 (No.4)</small>	<small>4 (No.10~13)</small>

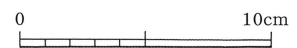
第18図 製鉄関連遺物構成図 (2)



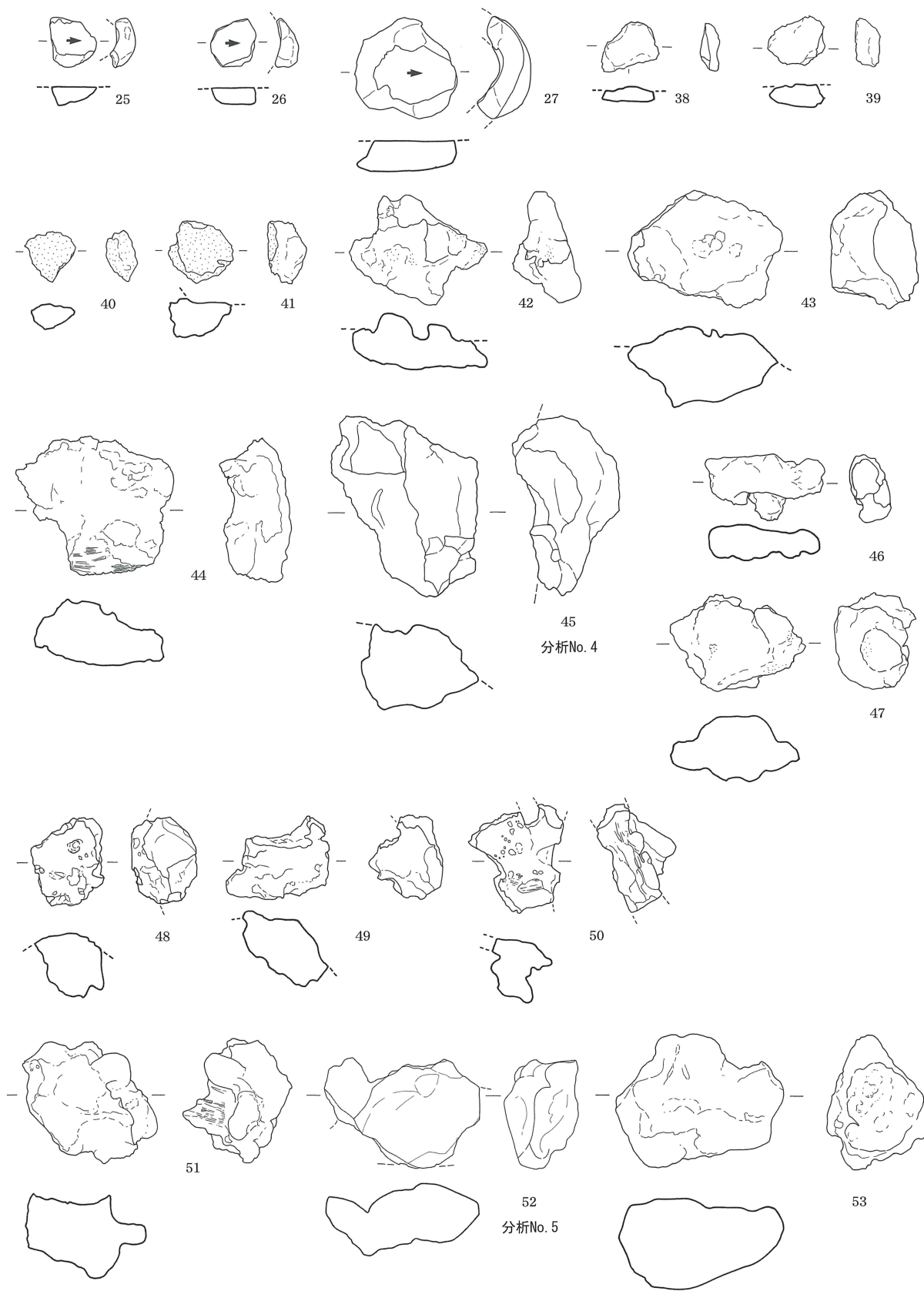
第19図 製鉄関連遺物 (1) (1/3)



※分析No.は第5章第2節で報告する
金属学的分析の番号を示す。(以下同じ)



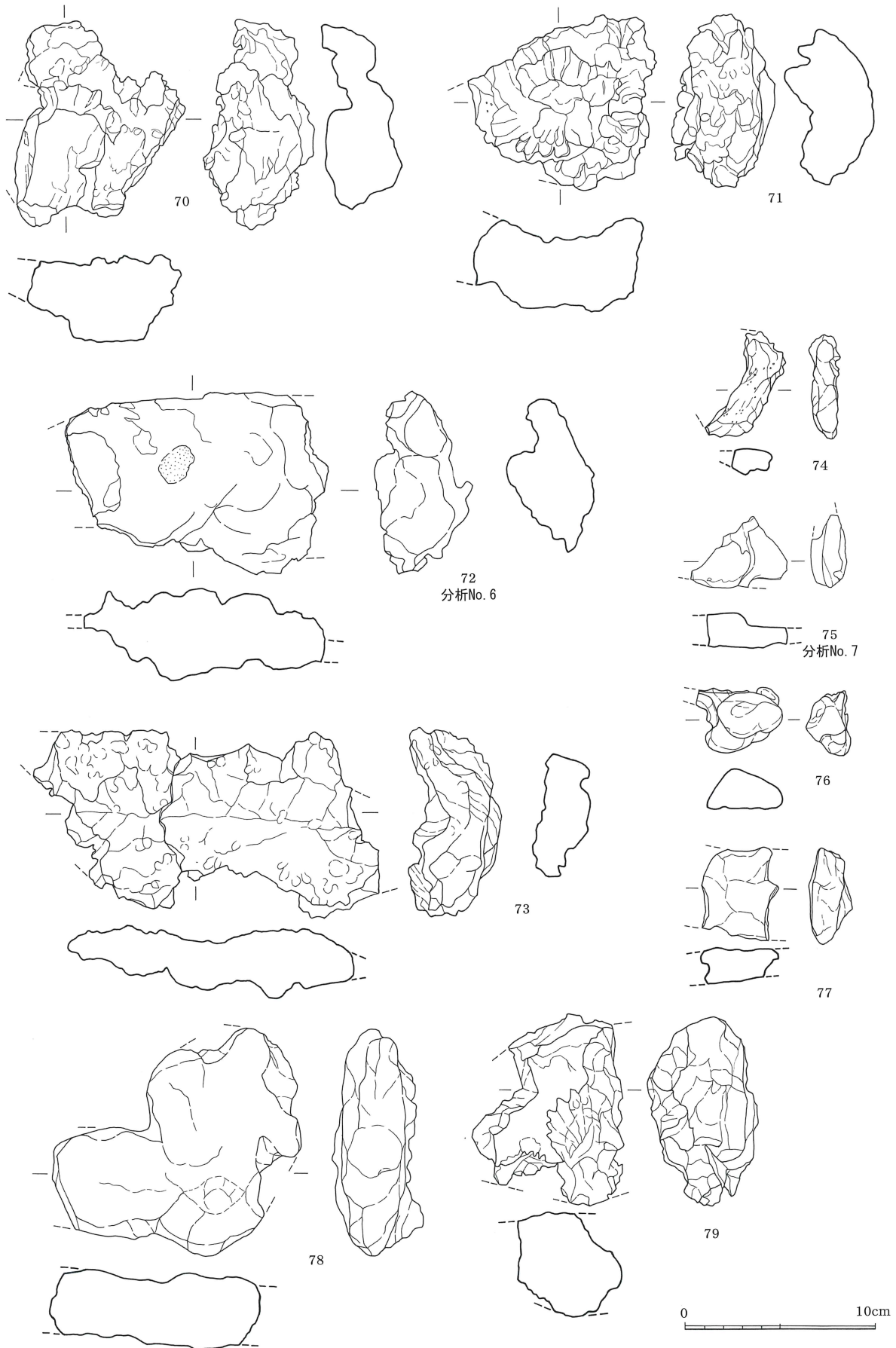
第20図 製鉄関連遺物 (2) (1/3)



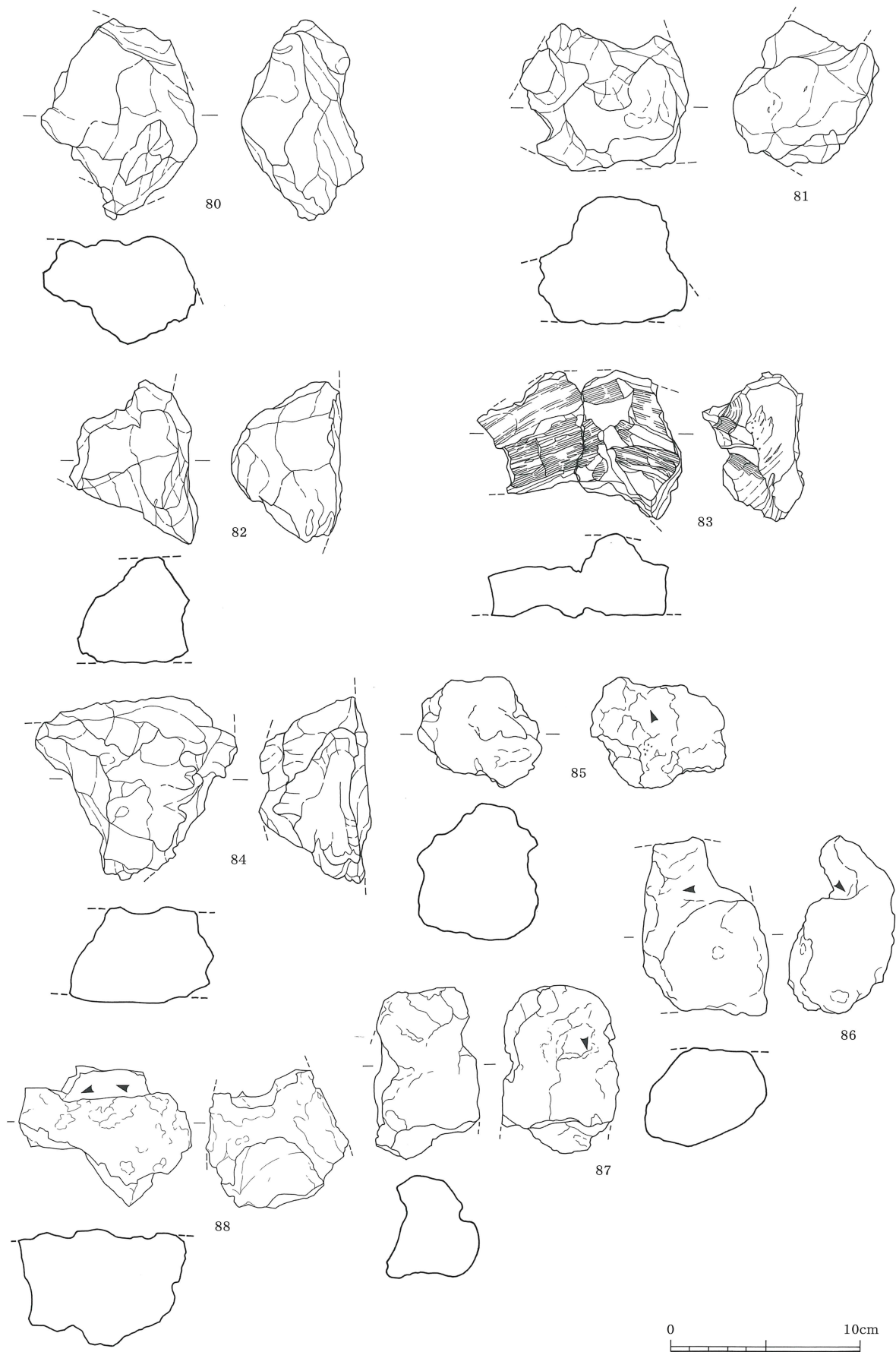
第21図 製鉄関連遺物 (3) (1/3)



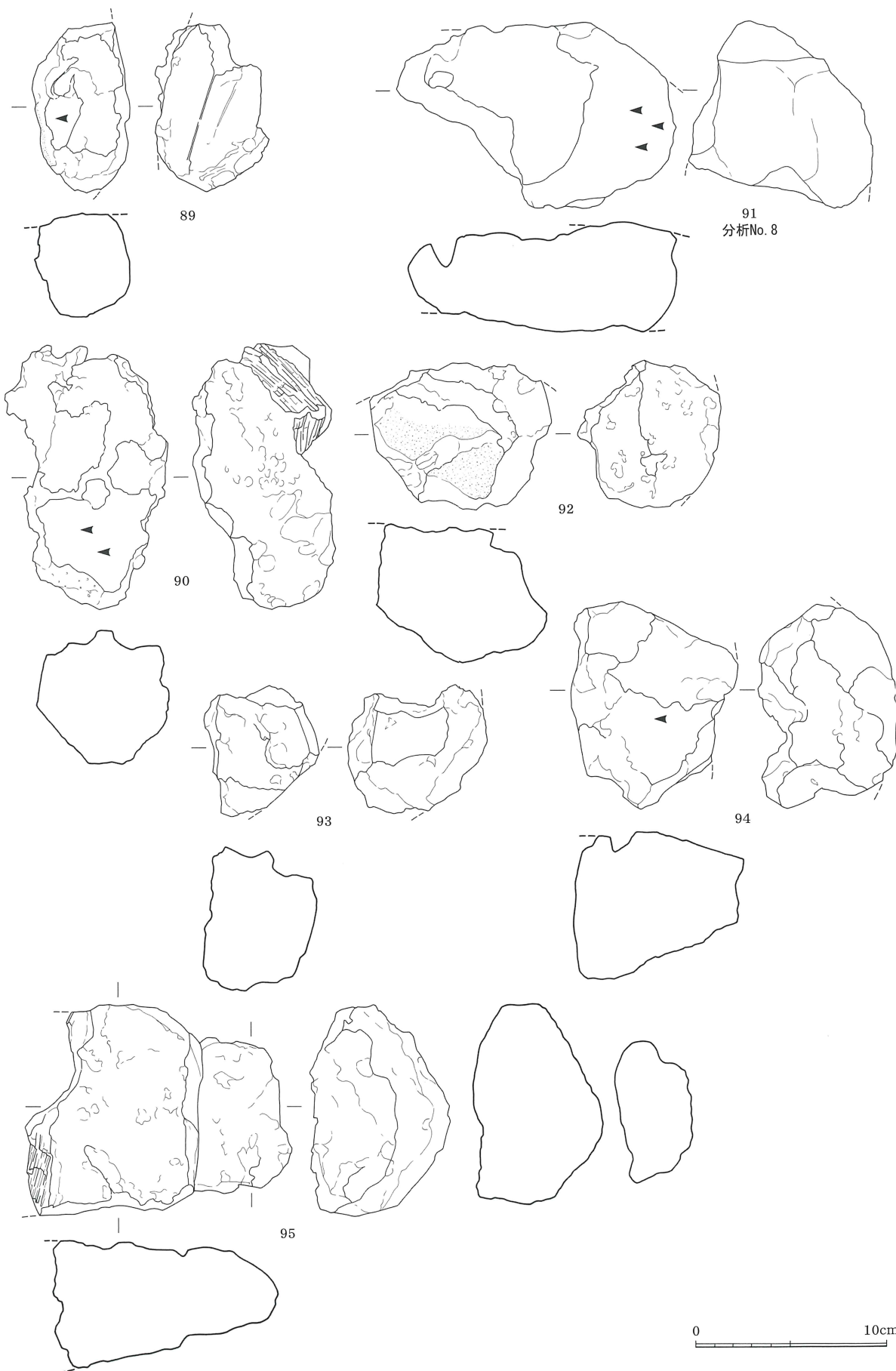
第22図 製鉄関連遺物 (4) (1/3)



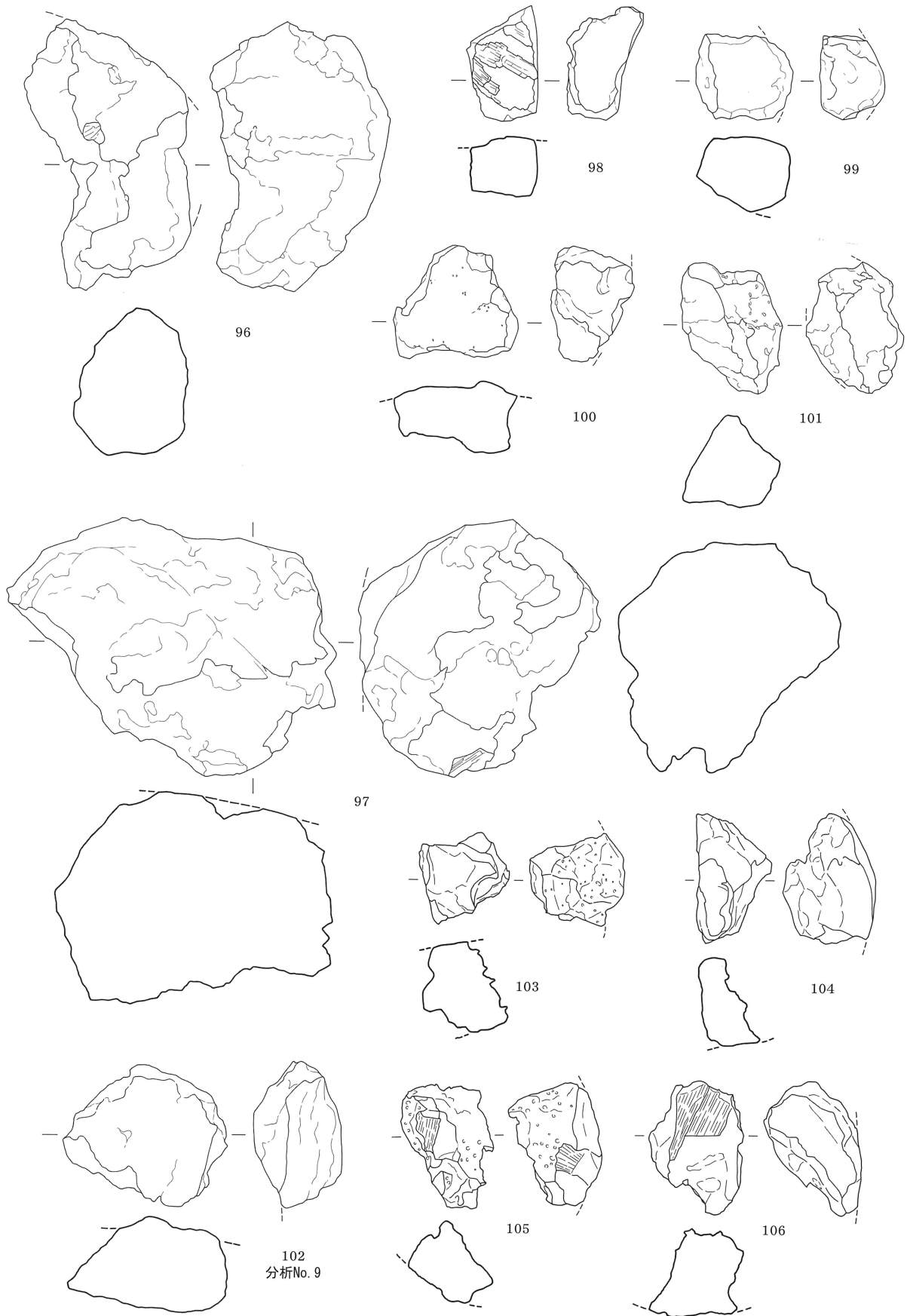
第23図 製鉄関連遺物 (5) (1/3)



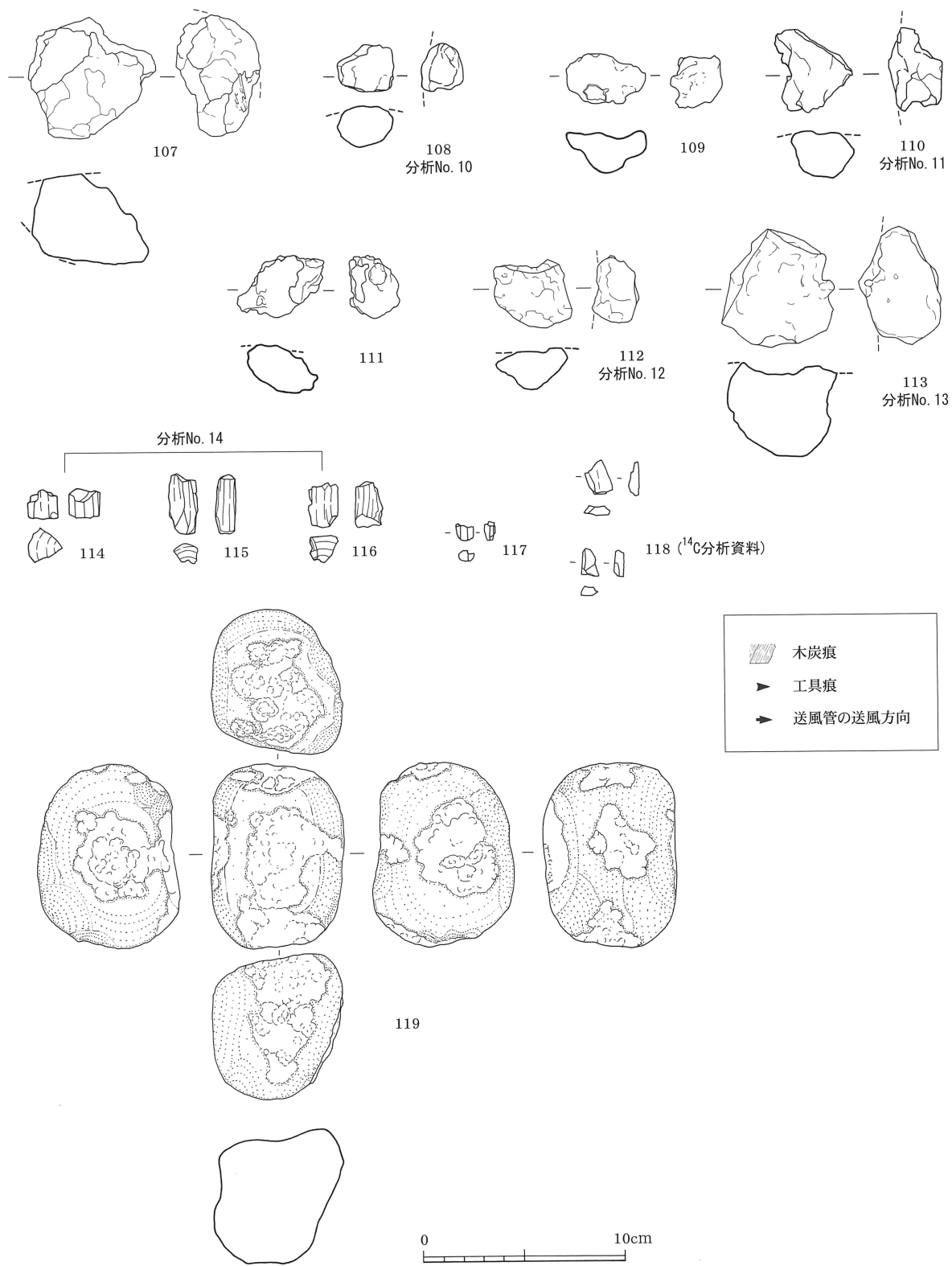
第24図 製鉄関連遺物 (6) (1/3)



第25図 製鉄関連遺物 (7) (1/3)



第26図 製鉄関連遺物 (8) (1/3)



第27図 製鉄関連遺物 (9) (1/3)

第3表 伊藤田中遺跡鉄関連遺物観察表 (1)

構成No.	遺物名	地区名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁石度	メタル度	遺構名	備考
			長さ	幅	厚さ					
1	炉壁 (長軸側・上段上半・頂部・被熱・酸化)	C区	5.4	5.0	3.7	44.5	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑下層)	側部3面が破面となった酸化色の炉壁破片。内面は左半分が薄い灰色で、外面は赤褐色となる。内面は上方が丸みをもって外反し、炉壁の頂部寄りを示す。胎土はスス入りで、芯部は炭化している。
2	炉壁 (長軸側・上段上半・被熱・酸化)	C区	5.6	5.4	2.9	42.1	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面が灰黒色に被熱する炉壁破片。側面4面が破面で、外面は表皮が下半部で剥落気味。平面形は弧状。
3	炉壁 (長軸側・上段上半・被熱・酸化)	C区	7.6	7.5	4.3	117.5	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面の中央部にスマキ痕の可能性をもつ上下方向の窪みを残す炉壁破片。スマキ痕は幅2.2cm程で上下方向の楕状となる。炉壁側部から外面は全周が破面で、外面には吸炭部分が露出する。上端部は斜めに途切れており、粘土単位の接合部の可能性をもつ。
4	炉壁 (長軸側・上段下半・発泡・砂鉄焼結付き)	C区	7.0	6.1	2.8	43.4	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面が僅かに溶化して、上端部寄りに砂鉄が焼結した炉壁破片。側部全周と外面が破面となっており、点々とスス痕が露出する。内面の溶化部分にもスス痕が確認され、一部が垂れとなる。
5	炉壁 (長軸側・上段下半・発泡・砂鉄焼結)	C区	5.8	5.7	3.2	37.7	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	前者と似た内面の溶化が強い炉壁破片。側部から外面は破面で、内面に露出したスス痕の端部が溶化して垂れが始まっている。また、僅かながら砂鉄が焼結する。
6	炉壁 (長軸側・上段下半・発泡・砂鉄焼結・マグネタ系滓付き)	C区	6.9	6.1	2.9	78.7	6	なし	1号炉 (S112)	内面上半が厚さ1.0cm前後の砂鉄焼結部となった炉壁破片。砂鉄の焼結部分はかなり還元が進んでおり、破面はマグネタイト化して青光りする。側面から外面下半は破面となっており、外面側にはスス入りの炉壁土が露出する。外面上半は砂鉄焼結からさらさら溶化が進んで、粒子の粗い結晶が顆粒状に並ぶ。炉壁としては中段下半の通風孔部上方で、溶化の強い部分の可能性もあり。
7	炉壁 (長軸側・中段上半・溶化弱)	C区	7.5	7.3	3.3	94.2	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面が垂れを伴う黒褐色の滓層となった炉壁破片。側部は全周が破面で、外面は表面が生きている。胎土はスス入りで、溶化が甘いめか内面に不規則な窪みを残す。
8	炉壁 (長軸側・中段上半・溶化弱)	C区	10.0	9.4	3.6	141.7	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面上端部が粘土質の垂れを生じ、下半部は溶損して黒褐色のガラス質滓に覆われた炉壁破片。側部から外面は全面破面となっており、外面は表面が剥落してススを多量に含む胎土が露出する。
9	炉壁 (長軸側・中段上半・溶化弱)	C区	9.2	8.4	4.6	133.9	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面が溶化・溶損した炉壁破片。側面は全周が破面で外面にはやや粗いスス痕が露出する。内面表皮は黒色ガラス質で、右下の部分の内側に向かいせり出している。通風孔部上頸部に向う突出部あり。
10	炉壁 (長軸側・中段下半・通風孔上・溶化強・通風孔周辺・滓付き)	C区	8.6	7.0	5.5	164.7	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面がやや厚い粘土質の滓層に覆われた炉壁破片。側部3面が破面で、外面は表皮が剥落して、赤褐色のスス入り胎土が薄皮状に張り付いている。横断面形は、右方向が溶損して薄くなっており、垂れも生じている。また、内面の右上端部は暗紫紅色となる。通風孔部は右下方向。
11	炉壁 (長軸側・中段下半・通風孔上・溶化強・滓付き)	C区	7.9	7.4	4.1	128.5	3	なし	1号路東排滓坑 S112東土坑	内面が溶化して青光りする薄皮状の滓層に覆われた炉壁破片。溶化した表面は、不規則な垂れと平滑な表面に砂鉄焼結部が共存する。側部から外面は全面破面で、スス入りの炉壁胎土が露出する。右寄りの下端部が内側にせり出して外面側が赤褐色の酸化色となっていることから、通風孔部の上頸部であることがわかる。内面の右上方は還元が強いめか青光りしている。
12	炉壁 (長軸側・中段下半・通風孔上・溶化強)	C区	9.1	8.5	3.5	120.9	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面が黒褐色の薄いガラス質滓に覆われた炉壁破片。側部4面はシャープな破面となっており、外面は表面が全面的に剥落する。外面の下端部は小腕型が赤褐色に被熱する。
13	炉壁 (長軸側・下段上半・通風孔周辺) (通風孔周辺・滓付き)	C区	9.7	8.7	7.1	262.8	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	外面が通風孔部周辺を示す明瞭な酸化色となった炉壁破片。左側面の一部には、本遺跡唯一の通風孔部の壁面が残されている。内面は強く溶化溶損して、中段が楕状に突出する。その下方は、木炭痕と垂れの目立つ不規則な窪みになっており、黒錆部分も確認できる。炉壁自体の平面形は、通風孔2孔の間のためか、「へ」の字状に左右の端部が内側に張り出している。通風孔間の溶損による形態である。側部から外面は破面となっており、全体が色調のやや異なる酸化色となる。
14	炉壁 (長軸側・下段上半・通風孔周辺・滓付き)	C区	13.0	12.3	5.4	430.6	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	上端の中央が通風孔部の頸部となった炉壁破片。内面上半は強く溶損して、中段に向い左右方向が窪んでおり、下半部は炉壁溶解物が瘤状に盛り上がる。側部から下面は全面破面、イガイガしたスス入りの炉壁胎土が露出する。通風孔部以外、茶褐色基調の色調となる。
15	炉壁 (長軸側・下段上半・通風孔周辺・滓付き)	C区	11.1	10.6	5.8	397.5	4	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	前者とやや類似する溶化状態となった炉壁破片。側部から外面は全面破面となっており、外面左上には炉壁胎土中の5.0cm大の礫が突出する。外面下半は、青黒い滓層がカーテン状からツララ状に垂れている。通風孔部自体の位置は不明。
16	炉壁 (長軸側・下段下半・通風孔下・滓付き)	C区	8.3	6.3	4.8	159.8	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑X層)	内面表皮がやや青味をもった黒褐色に溶化した炉壁破片。側部はシャープな破面となっており、下端部ではイガイガした滓の破面が露出する。外面は表面が剥落しており、右上部が通風孔寄りを示すように、小腕型が赤褐色となる。内面の左半分は再結合滓層。
17	炉壁 (長軸側・下段下半・通風孔下・滓付き・マグネタイト系滓付き)	C区	7.2	6.1	5.2	146.5	5	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面上端が瘤状の滓層となった炉壁破片。滓層表面は発泡したり、部分的に砂鉄が焼結する。内面中段にも粘土質主体の塊状の突出部あり。側部4面がシャープな破面で、外面は表面が全面的に剥落している。縦断面はややゆがりに反っている。
18	炉壁 (長軸側・下段下半・通風孔下・滓付き)	C区	10.7	7.1	4.9	192.4	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	表面が厚さ3.5cm以上の凹凸の激しい粘土質溶解物に覆われた炉壁破片。側部は部位により異なった状態の破面に覆われており、外面は胎土側がほとんど脱落してしまっている。内面下半は粘土質の垂れか木炭痕主体となる。
19	炉壁 (短軸側コーナー部・上段上半・被熱・酸化)	C区	5.2	4.1	5.2	43.1	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑一括)	内外面が生きている炉壁上半のコーナー部破片。側部4面が破面で、内面が褐色に被熱する。外面は面を成すように整えられ、赤褐色となっている。
20	炉壁 (短軸側コーナー部・上段下半・発泡・砂鉄焼結付き)	C区	5.4	4.4	3.5	77.4	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面が黒色ガラス化して、下端部寄りに僅かに砂鉄焼結部を残す炉壁破片。芯部の9割以上が火山性の円礫で、炉壁胎土中に含まれていたものであろう。右下の端部にはガラス質滓の垂れが突出する。
21	炉壁 (短軸側コーナー部・中段上半・溶化弱)	C区	12.5	8.8	5.8	389.5	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	分析資料No.1 136頁分析資料詳細観察表参照。
22	炉壁 (短軸側コーナー部・中段下半・通風孔上・溶化強)	C区	11.7	9.2	3.3	194.8	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面が平滑に溶化・溶損した炉壁破片。側部は全周が破面で、外面も表皮が全体に剥落してしまっている。内面上端部は溶化が弱く、小さな垂れも生じている。平面形は緩やかな弧状。
23	炉壁 (短軸側コーナー部・下段上半・通風孔周辺・滓付き)	C区	10.1	9.6	6.3	183.6	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面下半が1.5cm程の厚さをもつ炉壁溶解物に覆われた炉壁破片。縦断面形は逆くの字状で下半部が内側に反り返っている。内面には、5.0cm大以下の木炭痕が散存し、錆色も強い。側部から外面は破面となる。
24	炉壁 (短軸側コーナー部・下段下半・通風孔下・滓付き)	C区	8.1	7.8	5.7	227.6	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面上端が黒色ガラス質に溶化・溶損し、それ以下が結晶の発達した滓層となっている炉壁破片。側部は破面となっており、外面も表面が厚く剥離する。平面形は強い弧状で、右上方が通風孔部の可能性をもつ。
25	送風管	C区	2.5	2.4	1.3	5.1	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112東土坑)	内面の通風孔部壁面のみが生きている送風管の小破片。側部から外面は連続する破面となっている。通風孔部は楕状で、わずかなナデ痕をもつ。胎土は土器質。
26	送風管	C区	2.4	2.4	2.2	4.9	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112西土坑)	前者と似た送風管の通風孔部小破片。通風孔部の壁面は楕状で、やや荒れている。また、壁面は左方向がより赤褐色となる。破面や胎土は前者と同様。
27	送風管	C区	5.3	5.2	2.8	46.0	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112西土坑)	径5.0cm大の送風管破片。内外面が生きており、側部全周が破面となる。通風孔部の径は現状で3.6cmを測る。肉厚は右側が薄くなって1.0cmの厚さをもち、左側の破面では、1.4cmを測る。全体に赤褐色に被熱しているが、部位により微妙に色調が異なる。外面の成形は長軸方向へ帯状の削りによる。
28	砂鉄 (自然・犬丸川採取)	-	-	-	-	20.0	5	なし	砂鉄 (犬丸川)	分析資料No.2 136頁分析資料詳細観察表参照。

第4表 伊藤田田中遺跡鉄関連遺物観察表(2)

構成No.	遺物名	地区名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁石度	メタル度	遺構名	備考
			長さ	幅	厚さ					
29	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	20.0	5	なし	1号炉 (S112 炉本体)	分析資料No.3 137 頁分析資料詳細観察表参照。
30	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	254.1	-	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑一括)	-
31	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	216.0	-	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑炉壁堆積1)	-
32	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	198.4	-	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑炉壁堆積2一括)	-
33	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	116.8	-	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑Ⅲ層一括)	-
34	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	152.1	-	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑一括)	-
35	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	96.8	-	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑Ⅳ層一括)	-
36	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	221.7	-	なし	1号炉 (S112)	-
37	砂鉄 (遺跡)	C区	-	-	-	94.5	-	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑下一括)	-
38	砂鉄焼結塊	C区	2.9	2.6	1.0	8.5	4	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑炉壁堆積1)	厚さ7mm程の薄板状の砂鉄焼結塊破片。側部3面は破面で、下面は炉壁面に接していたため、浅い舟底状となっている。表面は僅かに垂れが生じはじめた程度で、破面には砂鉄粒子が区別される。
39	砂鉄焼結塊	C区	2.9	2.5	1.2	11.4	2	なし	1号炉 (S112 炉本体)	前者よりやや環元が進んだ砂鉄焼結塊破片。1.0cm程の厚みをもち、側部は全周が破面となる。上面寄りには環元が進み、重れも確認される。下面は砂鉄粒子が区別できる剥離面で、炉壁面に接していた可能性が高い。
40	砂鉄焼結塊 (含鉄)	C区	2.7	2.6	1.6	8.8	2	錆化 (△)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑炉壁堆積2)	側部3面が破面となった小塊状の砂鉄焼結塊破片。前者と似て上面寄りの滓化がはじまり重れも生じている。破面は炉壁表面からの剥離面で、砂鉄粒子が区別できる。含鉄部は芯部の極小範囲。
41	砂鉄焼結塊 (マグネタイト系滓付き)	C区	3.3	3.2	2.0	21.4	4	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	厚さ1.5cm程の砂鉄焼結塊破片。表面はマグネタイト化して青黒くなっている。側部は全周が破面で、表層がマグネタイト化しているのに対して、下層から外面にかけては焼結した砂鉄粒子が区別できる。
42	砂鉄焼結塊 (マグネタイト系滓付き)	C区	7.0	5.6	3.5	99.8	4	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	表面が垂れと木炭痕に覆われた、環元の進んだ砂鉄焼結塊破片。側部3方が破面となっており、外面は炉壁表面からの剥離面と推定される。表層の8割方がマグネタイト化しており、外面のみ砂鉄粒子が区別される。
43	砂鉄焼結塊 (マグネタイト系滓付き)	C区	7.9	5.9	4.5	234.2	5	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	厚さ4.5cm程の厚みをもった砂鉄焼結塊破片。表面のみ砂鉄焼結部が確認され、全体の9割方がマグネタイト化して青光りする。滓は緻密で気孔はやや粗い。左側の側部上段には垂れあり。
44	砂鉄焼結塊 (マグネタイト系滓付き・含鉄)	C区	8.1	7.1	3.7	154.1	4	錆化 (△)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	左下側の側部が破面となった含鉄の砂鉄焼結塊破片。下面は浅い碗形の剥離面で、表面には灰褐色に被熱した炉壁土の痕跡を残す。内面上半部には小さな垂れや砂鉄焼結部が混在し、右下側がマグネタイト化して木炭痕が含鉄部となっている。含鉄部は錆化して黒黯になる。
45	砂鉄焼結塊 (マグネタイト系滓付き・含鉄)	C区	7.6	9.3	4.2	315.4	5	錆化 (△)	1号路東排滓坑 (S112 東土坑)	分析資料No.4 137 頁分析資料詳細観察表参照。
46	砂鉄焼結塊 (マグネタイト系滓付き・含鉄)	C区	6.2	3.6	2.2	35.4	5	H(O)	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	茶褐色の酸化土砂に覆われた含鉄の砂鉄焼結塊破片。厚さ1.7cm程の薄板状で、側部は破面となっている。下面は凹凸のある剥離面。滓の大半がマグネタイト化しており、砂鉄粒子はほとんど区別できない。含鉄部は下側に突出した滓の芯部。
47	砂鉄焼結塊 (マグネタイト系滓付き・含鉄)	C区	6.9	5.0	4.1	106.2	3	H(O)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	厚さ3.8cm程の塊状をした砂鉄焼結塊破片。表面は砂鉄粒子を区別できる状態で、僅かに垂れがはじまっている。下半の8割方が滓化している。外面は不規則な凹凸に覆われており二次的な付着物も多い。含鉄部は砂鉄焼結部の芯部。
48	マグネタイト系遺物	C区	3.8	4.6	3.4	60.5	5	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	厚さ2.5cm程の青光りしたマグネタイト系遺物破片。側部は破面となっており、下面は垂れの残る剥離面となる。上面から肩部にかけては小さな凹凸が連続するマグネタイト系滓特有の質感を示す。破面の結晶が発達して青光りが強い。
49	マグネタイト系遺物	C区	6.3	4.3	3.8	77.2	4	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	上下面に不規則な盛り上がりや垂れがあるマグネタイト系遺物破片。破面が側部から下面にかけて、飛々に残されている。右上手側の突出部のみに表面に砂鉄が焼結する。破面は青光りして表皮の一部が錆色となる。
50	マグネタイト系遺物	C区	4.9	5.5	4.0	61.0	4	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	径8mm以下の細い流動単位が絡み合うように垂れているマグネタイト系遺物破片。側部は狭い破面が連続し、表面は垂れと木炭痕の残る半流動状の平滑面となっている。典型的なマグネタイト系遺物で、青光りして磁着も強い。
51	炉内流動滓 (炉壁付き)	C区	6.9	6.3	5.6	167.8	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	表面が炉壁土の痕跡に覆われた炉内流動滓破片。左側部が主破面で、少し流動滓の重層や滓の突出部が生じている。右側部上半が明瞭な木炭痕。滓質は緻密ながら、炉壁粉や木炭の隙間に貫入した形状と推定される。
52	炉内流動滓	C区	7.9	5.7	3.5	183.2	2	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	分析資料No.5 137 頁分析資料詳細観察表参照。
53	炉内流動滓 (炉壁付き)	C区	8.6	7.0	5.2	262.5	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	基本的には構成No.51と似た、表面が炉壁土に覆われた炉内流動滓破片。左右の側部が破面となっており、一見、流出孔縁の外形を示す。上面は平坦気味で左右方向に流動し、側部から下面は舟底状に突出する。芯部は緻密な滓の可能性をもつ。
54	工具付着滓	C区	0.7	0.6	0.1	0.1	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑一括)	厚さ0.4mm程の工具付着滓の小破片。爪の破片様の滓で、内面が浅い碗状の平滑面となっている。外面はほぼ平滑で僅かに盛り上がりあり。
55	工具付着滓	C区	1.2	0.8	0.3	0.4	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑一括)	側部4面が破面となった厚さ2.5mm程の薄板状の工具付着滓破片。内面は工具痕による平坦面となっており、上手側の側部が上方に立ち上がる。外面は顆粒状のイガイガした状態で、上手側に向かって徐々に薄くなる。滓質は緻密ながら僅かに気孔あり。工具痕が平坦なことと、断面形状が方形または隅丸方形になる工具が想定される。外面は構成No.56とよく似ているが、出土位置が異なる。
56	工具付着滓	C区	2.5	1.2	1.3	2.4	2	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑一括)	本遺跡出土の最も代表的な工具付着滓破片。最大厚みは3.5mm程で、内面が「L」字状の縦断面形を示す平滑面となる。側部は狭い破面となっており、外面は細かい凹凸のある滓表面となる。内面の工具痕からみて、工具本体は隅丸方形に近い断面形をもつ細い鉄棒が想定される。
57	流出孔滓	C区	4.1	2.2	2.1	14.6	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑一括)	縦断面形状が「U」字状に曲がっている幅1.5cm程の特異な流出孔滓破片。半割されたパイプ状の滓で下面が碗状。上面の右半分は滓が詰まっており、逆に上面左半分はきれいな碗状となる。左側部のみが破面で、右側部は滓が途切れ気味。細身の滓で、煉炭初期の工具流入滓に近い流出孔の滓破片か。
58	流出孔滓	C区	6.2	4.2	4.2	76.4	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	縦断面形状が浅い「U」字状をした流出孔滓破片。上面右半分と側部にかけてが半流動状になっており、残る側部から下面は左右方向に伸びて、丸みを帯びた舟底状となる。表面の左半分は炉壁粉に覆われる。
59	流出孔滓	C区	6.9	4.8	3.8	101.6	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	左側部が破面となった流出孔滓の先端部破片。左右方向に向く柱状の滓で、上面は右側に傾斜した流動状で終息する。側部から底面は炉壁粉が点々と付着する。滓質は緻密ながら、原料砂鉄のチタン量が高いため流動性が低い。

第5表 伊藤田中遺跡鉄関連遺物観察表 (3)

構成No.	遺物名	地区名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	遺構名	備考
			長さ	幅	厚さ					
60	流出孔滓	C区	6.4	5.2	4.1	115.8	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	前者とやや似た形状を示す流出孔滓の先端部破片。左側部は滓が塗切れ気味で不規則な破面となっている。上面は平坦気味で、右側の肩部は傾斜して下端部が破面となる。全体感上半部の欠けた円柱の破片様。
61	流出孔滓	C区	8.7	7.6	8.3	526.1	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑埋土一括)	左右の側部がイガイガした破面となった、大ぶりの流出孔滓破片。縦断面は深い「U」字状で、上面の中央部が徐々に盛り上がっている。短軸側の側部から下面は舟底状で、表面には灰色の炉壁土が面的に張り付いている。流動性の極めて低い滓で、原料砂鉄の性質を反映している可能性が高い。
62	流出孔滓	C区	15.1	7.0	5.3	563.1	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	上面が平坦気味で左右に伸びる流出孔滓破片。左右の側部が破面になっており、短軸側の側部から下面は丸棒状となる。表面には灰色の炉壁土が点々と固着している。細長い滓のために流出孔滓の可能性をもっているが、断面から流出孔滓とした。
63	流出孔滓 (工具痕付き)	C区	4.4	4.4	3.1	46.6	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	左右の側部が小破面となった短い棒状の流出孔滓破片。上面は丸みを持った棒状で、表面の一部に工具によるアタリあり。側部から下面は凹凸を残しながらも、全体的には舟底状となり、流出孔滓に接して形成されている。
64	流出孔滓 (工具痕付き)	C区	6.1	4.6	2.9	71.8	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑下層)	前者と比較的似た形状の扁平な流出孔滓破片。上面は浅い棒状から平坦面で、右側の端部が終息する。左側部は分りにくく破面となる。工具痕は上面左側の肩部。
65	流出孔滓 (工具痕付き)	C区	6.3	5.8	4.4	181.7	2	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	左側部がシャープな破面となった、4.5cm程の厚みをもった流出孔滓の先端部破片。短軸方向の断面形は横広りの楕円形で、上面左側と下側の側部に2ヶ所の工具痕を残す。下面は浅い舟底状で右側部で滓が塗切れる。滓質は緻密。
66	流出孔滓 (工具痕付き)	C区	9.2	8.1	5.4	373.5	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	左側部が破面となった、前者を一回り大きくした様な形の流出孔滓破片。短軸方向の断面形は不整形円形で、上面には3単位の斜め右方向からの工具痕が残されている。上面の滓は黒色ガラス質で、右側部が収束する。下面はややイガイガした浅い舟底状。破面の気孔は乱雑で、滓が流動しつつ固化したことを示す。
67	流出孔滓 (含鉄)	C区	9.4	6.3	3.0	107.0	3	錆化 (△)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	左側部が破面となった浅い棒状の外観をもった流出孔滓破片。右側部は収束気味で下側の肩部は欠落する。上面は半流動状で、丸みをもった舟底状の底面には炉壁粉が多数固着する。含鉄部は左側部上下。
68	流出満滓	C区	4.8	4.7	2.5	39.9	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	左右の側部が小破面となった浅い棒状の流出満滓破片。構成された6点の流出満滓の中では流動性が高く、中央付近には流れ破が生じている。側部から下面は突出部をもつ舟底状で、一部に木炭痕あり。流出孔滓の可能性も残る。
69	流出満滓	C区	8.2	6.5	3.9	186.5	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	左右の側部が破面となった幅8cm程の流出満滓破片。上面は短軸側の一部が窪んでおり、下面は突出部が2ヶ所に残る。滓質は流動性が低い。底面が2単位となるのは、流出満滓が二次的に変形しているため。
70	流出満滓	C区	10.8	9.1	5.8	371.8	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	前者と似た2条の流動単位が並走する流出満滓破片。左側部下側の側部が破面で、右側部は激しく変形しながらも収束する。上下とも滓の主体は下側で、上側側部の滓は本体に寄り添うような流動状となる。
71	流出満滓	C区	10.1	9.3	5.4	433.3	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	左側部がシャープな破面となった幅9.0cm程の流出満滓破片。上面中央部は浅く窪み、下面はやや幅広い舟底状に突出する。左側部から2cm程右側に小さな段を生じており、この部分が流出孔滓であったことがわかる。残る右寄りの8割方は流出満滓としての広がりをもつ。滓質は流動性が低くイガイガしている。
72	流出満滓	C区	13.9	9.5	5.2	444.7	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	分析資料No.6 138頁分析資料詳細観察表参照。
73	流出満滓	C区	18.1	9.8	4.9	546.6	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑埋土一括)	二片が接合して550g近い重さをもつ典型的な流出満滓破片。全体に幅広い棒状で、表裏面がイガイガしながらも流動している。左右の側部と上側側部の一部が小破面となる。下面は面をなし、灰色に被熱した細かき破片が全体に貼り付いている。
74	流動滓	C区	5.6	4.3	1.7	24.9	2	なし	1号炉 (S112 炉本体)	左側部が主破面となった扁平な流動滓破片。右側部中央部にも小破面あり。上面は波状の流動滓の表面で、下面には炉壁土様の圧痕がなる。破面はシャープでやや結晶が発達する。
75	流動滓	C区	5.2	3.8	2.0	35.1	2	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	分析資料No.7 138頁分析資料詳細観察表参照。
76	流動滓	C区	4.5	3.5	2.3	40.4	3	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	平滑な流動単位が不規則に積み重なったような流動滓の小破片。左側部上側の端部のみが小破面になっており、滓表面は流動状を示す。下面は平坦で流動単位の隙間が露出しており、点々と炉壁粉が付着する。
77	流動滓	C区	4.9	4.1	2.3	55.4	2	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	幅5cm程の扁平な流動滓破片。左右の側部が破面になっており、上面は平滑となる。側部から下面はごく浅い舟底状で、炉壁粉が点々と付着する。滓質は緻密で、例外的に流動性が高い。
78	流動滓	C区	13.1	12.1	4.8	584.2	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	表面全体が茶褐色の土砂に覆われた、扁平な形状から流動滓とした資料である。最大厚みは3.0cm程で、平面的には左から右に向かい逆「L」字状に広がっている。左側部は主破面で、右寄りの肩部にも2ヶ所の破面あり。上面は前者と同様、平滑な可能性が高く、下面全体に炉壁粉が付着する。本遺跡出土品中では唯一の流動性の良い滓である。
79	炉底塊	C区	10.1	8.0	5.8	407.3	3	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	上面の8割方と下面の半分程度が生きている。厚さ5.5cm程の炉底塊側部破片。左右の側部から下側の側部が主破面で、下面の一部も破面になっている。上側の側部は炉底塊の側部として生きており、僅かに炉壁土が付着する。上面は下側部に向い傾斜してやや平滑な形状となっており、下面は楕円形となる。滓質は緻密で中層の一部に気孔の肥厚が目立つ。
80	炉底塊	C区	10.5	8.2	6.4	453.8	3	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑埋土一括)	表面の8割方以上が酸化土砂に覆われた炉底塊の側部破片。左右の側部が主破面で、上面は右方向に傾斜する。下面は浅い楕円形で、灰色の炉床土の一部に固着する。破面はシャープで、かなり意図的に打ち割られた炉底塊の端部片であろう。
81	炉底塊	C区	8.8	7.6	7.6	474.2	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	前者と同様、上面から側部が主破面の酸化土砂に覆われた炉底塊破片。滓部の厚みは5.0cm強を測り、側部4面が強く打ち欠かれた破面となっている。下面は楕円形で、表面には点々と炉床土、または炉壁粉が固着する。含鉄部を見分ける意図のもとに打ち割られた資料であろう。
82	炉底塊 (炉床土付き)	C区	8.6	6.7	5.8	309.2	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	前者と基本的に似た炉底塊破片。側部四角がシャープな破面に覆われており、各破面はそれぞれが3〜4単位に分かれている。下面は浅い皿状で、全面に灰褐色の炉床土が固着する。上面は中央部のみ生きており、炉底塊自体の厚みは5.5cm強となる。
83	炉底塊 (炉床土付き)	C区	10.6	7.8	5.4	315.4	1	なし	1号炉 (S112)	上面に最大6.0cmをこえる3単位の木炭痕を残す炉底塊破片。側部は5ヶ所がシャープな破片となっており、皿状の下面には炉床土の痕跡を残す。滓質は緻密で木炭痕周辺はやや青色が強い。なお、木炭痕は針葉樹ではないと判断される。下側の肩部の一部が生きており、炉底塊の中でも側部寄りの破片か。
84	炉底塊 (炉床土付き)	C区	10.6	9.6	5.9	530.1	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	浅い舟底状の下面全面に、灰褐色の炉床土の痕跡を全体に残す炉底塊破片。上面と右下側の側部が生きており、残る側部2面が数単位からなるシャープな破面になっている。最大厚みは5.5cm程で、密度が高く気孔の少ない典型的な炉底塊となる。右下側の側部が炉底塊の側部の立ち上がり部とみられ、炉壁と接していたため急角度を示す。
85	炉底塊 (工具痕付き)	C区	6.5	5.8	7.1	309.0	3	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	右側部上側に径2.3cm程の丸棒状の工具痕が残されている炉底塊破片。上面と側部の半分程度が生きており、最大厚みは7.0cmを測る。右下側の側部は半流動状で、表皮は部分的に黒色ガラス質。微細な鉄部が生じているためか、肩部を中心に複数の筋色が見られる。
86	炉底塊 (工具痕付き・炉床土付き)	C区	9.4	6.5	5.5	349.3	3	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	上面が手側が左右方向の溝状に窪んでいる炉底塊側部破片。上面と右側部が生きており、左側部は大きな破面となる。上面の窪みは幅3.5cmを測るもので、工具痕の可能性が高い。表面全体に炉壁粉を含む酸化土砂が目立ち、工具痕付きの流出孔滓の可能性もあり。下面は右上方に立ち上がる楕円形となっており、褐色の炉壁土が面をなす。
87	炉底塊 (工具痕付き・炉床土付き)	C区	8.8	5.5	6.1	366.2	4	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	右側部中段に上側から下側部に向かう径1.6cm程の中空部が残されている炉底塊側部破片。左側部と下側の側部がシャープな破面になっている。滓質は緻密で、結晶の肥大のためか破面に光沢をもつ。
88	炉底塊 (工具痕付き・含鉄)	C区	9.0	6.2	7.4	430.6	4	H(○)	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	上側の側部に太い丸棒状の工具痕が2単位残されている炉底塊破片。上面が生きており、左右の側部から下側の側部がシャープな破面となる。上面はイガイガした平坦面で、下面は炉床土が張り付いた歪んだ舟底状となる。滓質は緻密で一部に光沢をもつ。上側側部が炉底塊の側部に相当するもので、工具痕から側部に沿って径2.2cm以上の棒状の道具が差し込まれていることがわかる。
89	炉底塊 (砂鉄焼結付き・マグネサイト系滓付き・工具痕付き・炉壁粉付き)	C区	8.9	5.1	5.9	363.2	5	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	下面にスス入りの炉壁土が貼り付く様に残されている、工具痕付きの炉底塊側部破片。短軸側の側部から左側部が破面で、上面には浅い工具痕が確認される。左側部の破面の一部は砂鉄焼結部となっており、滓の芯部は青灰色するマグネサイト系の滓となる。また、流動性に欠けている。下遊の可能性もあり。
90	炉底塊 (炉内流動滓付き・工具痕付き・炉壁粉付き・炉床土付き)	C区	13.8	8.5	7.4	698.3	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑埋土一括)	上面下側に幅広い丸棒状の工具痕を残す特異な炉底塊破片。明瞭な破面は下側の端部のみで、側部から平底面の8割方は灰色や灰褐色の炉床土に覆われている。下面上側には、4.0cmを超える木炭痕が残る滓部が突出する。形態的には炉底塊本体とは別で、炉壁基部や炉壁の外周部に漏れ出したような炉内流動滓主体の資料であろう。工具痕は右方向から2単位とみられる。

第6表 伊藤田中遺跡鉄関連遺物観察表 (4)

構成No.	遺物名	地区名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁石度	メタル度	遺構名	備考
			長さ	幅	厚さ					
91	炉底塊 (炉内流動滓付き・工具痕付き・炉床土付き)	C区	14.2	9.8	8.8	1175.4	4	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	分析資料№ 8 138 頁分析資料詳細観察表参照。
92	炉底塊 (砂鉄焼結塊・マグネタイト系滓付き・含鉄)	C区	9.5	4.6	7.5	651.4	4	H(○)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	上下面と上手側の側面が生きている含鉄の炉底塊破片。左右の側面と下手側の側面が破面となる。平坦な表面上には砂鉄が焼結し、下手側の破面は黒色となっている。最大厚みは7.8cm程で、炉底塊の側面破片とみられる。下面は右方向にせり上がり、炉床土が点々と固着する。
93	炉底塊 (含鉄)	C区	7.3	6.8	7.5	360.9	3	H(○)	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	下手側の側面に赤褐色に成熟した炉壁部分が残る炉底塊の側面破片。上下面が生きており側面3面がシャープな破面となる。下面から下手側の側面は立ち上がり急で、炉底塊の端部となっている。含鉄部は不明瞭で、おそらく上面寄りの芯部であろう。
94	炉底塊～流出孔滓 (流出孔滓付き)	C区	10.8	8.7	7.7	781.2	3	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	前者を一回り大きくした様な炉底塊の端部破片。上下面と右側面が生きており、残る側面3面がシャープな破面となっている。上面中央部は右方向からの工具痕により窪みと。下面から右側面は梯形に立ち上がり、炉底塊の長軸端部を示す。滓質は極めて緻密。
95	炉底塊～流出孔滓 (接合)	C区	14.0	11.1	7.4	1083.6	3	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	2片が接合した炉底塊から流出孔滓にかけての破片。主体は流出孔滓で、右方向に向かって徐々に幅が狭くなっている。左側面のみが破面で、流動する右側の端部は終息する。端部方向の断面形は強い梯形となっており、下面は舟底状に突出する。破面の気孔は不規則で粗い。流出孔中での固化したためか、表面全体に灰色の炉壁粉が付着する。
96	炉底塊 (流出孔滓付き・コーナー部・工具痕付き・炉床土付き)	C区	14.2	8.7	9.4	1270.0	2	なし	1号炉 (S112 埋土一括)	前者やや似た炉底塊の端部から流出孔滓にかけての破片。左側の側面全体が破面となっており、右方向に向い絞られた形で終息する。また、右側面下手側が径3.0cm程の丸棒状に突出しているため、工具痕流入滓の可能性もあり。
97	炉底塊 (炉床土付き・流出孔滓付き)	C区	17.4	13.5	12.7	2850.0	2	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑埋土一括)	右側面上手から下面にかけて流出孔滓の基部、または工具痕流入滓が残されている炉底塊の長軸端、右コーナー部寄り破片。炉底塊としては本遺跡最大の破片で、炉底塊に対して流出孔の位置がわかる資料。上下面と右側面上手側の流出孔滓部分が生きており、残る側面の7割方が破面となる。炉底塊本体の最大厚みは8.0cm程で、下面全体が灰褐色の炉床土に覆われた浅い舟底状になる。本資料などにより、炉床が粉炭層でなく粘土張りであることがはっきりする。
98	炉内滓	C区	6.1	3.7	4.0	113.7	2	なし	1号炉 (S112)	側面4面が破面となった炉内滓破片。上面には4.0cm大を超える木炭痕が残り、下面は波状の砂鉄焼結部となる。滓質は緻密。上下逆の可能性もやや残る。
99	炉内滓	C区	5.0	4.5	3.9	134.2	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	酸化土砂に覆われた厚さ3.0cm程の炉内滓破片。右側面と下面が生きており、残る側面から上面はシャープな破面となっている。破面の一部は結晶の肥大のために光沢をもつ。
100	炉内滓	C区	6.6	6.0	4.4	161.3	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	上下面と上手側の側面が生きている炉内滓破片。左右の側面から上手側の側面が破面となる。端部が薄くなって終息する炉底塊の側面破片でもあり、表面にはかすかに炉床土や炉壁粉が固着する。
101	炉内滓	C区	6.8	5.2	5.1	190.6	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	右側面下半と下面が生きている炉内滓破片。側面2面と上面の9割以上が破面となっており、緻密な滓層が露出する。横断面から見て炉底塊の側面破片と見られる。下面は右方向にせり上がり、炉床土が張り付いている。
102	炉内滓 (砂鉄焼結塊・マグネタイト系滓付き・含鉄)	C区	8.7	7.5	4.7	308.2	5	M(◎)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	分析資料№ 9 139 頁分析資料詳細観察表参照。
103	炉内滓 (炉床土付き)	C区	4.8	4.7	5.0	98.5	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	左右の側面がイガイガした破面となった炉内滓破片。残る表面は生きており、下面には明瞭に炉床土が張り付く。上下面と上手側の側面は生きており、破面にはやや気孔が目立ち、滓質は密度が低い。
104	炉内滓 (炉床土付き)	C区	6.8	4.0	4.9	104.2	3	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	きれいな梯形の下面に褐色に成熟した炉床土が密に張り付いている炉内滓破片。左右の側面が大きな破面となっており、生きている上面が小範囲で確認される。破面にはやや黒錆が吹いており、含鉄部を割り取っている可能性が高い。
105	炉内滓 (炉床土付き)	C区	6.6	4.9	4.9	107.1	2	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	厚みは前者より薄いもの、側面が破面に覆われた炉内滓破片。破面の気孔は不規則で厚も多。また左右の側面を中心に2.0cm前後の木炭痕が残されている。下面は丸みをもった舟底状で、炉床土が薄く張り付く。炉底塊を荒削りした後に生成した鉄部を分別する、中割り段階の炉内滓か。
106	炉内滓 (炉床土付き)	C区	7.0	5.0	5.1	176.7	3	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	側面3面と上面の8割がシャープな破面となった炉内滓破片。前者と割り方は共通しており、縦方向に割った後に炉底塊下半部の滓主体部と上半の含鉄部を割り分けている可能性が高い。下面は丸みをもった舟底状で、炉床土が張り付いている。
107	炉内滓 (含鉄)	C区	6.3	6.0	4.5	162.0	3	錆化(△)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	上下面の下手側から側面2面にかけて破面となっている、含鉄の炉内滓破片。生きている部分の最大厚みは4.0cm程度で、炉底塊の側面寄り破片であることがわかる。上面は平坦で側面から下面は右方向に向い緩やかに立ち上がる。破面の結晶が肥大してキラキラと輝き、下面寄りの芯部に含鉄部が生じている。
108	炉内滓 (含鉄)	C区	2.7	2.3	1.8	16.0	5	H(○)	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	分析資料№ 10 139 頁分析資料詳細観察表参照。
109	炉内滓 (含鉄)	C区	3.9	2.5	2.6	19.5	4	H(○)	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	下手側の側面が錆ぶくれの欠けとなった含鉄の炉内滓破片。浅い皿状の上面は生きている可能性が高く、側面は全面が破面となっている。酸化土砂に覆われているためにはっきりとしないものの、下面の中央部が生きているとすれば、炉壁表面での生成品であろう。含鉄部は上面寄りに比較的広い。
110	炉内滓 (含鉄)	C区	3.8	4.1	2.2	25.4	5	H(○)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑) 炉壁堆積 2)	分析資料№ 11 139 頁分析資料詳細観察表参照。
111	炉内滓 (含鉄)	C区	4.2	3.1	2.5	25.8	4	H(○)	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	表面が砂鉄焼結部に近い滓化状態を示す含鉄の炉内滓。側面は不規則な破面となっており、下面はやや突出する割離面様。構成№ 109より明瞭に炉壁表面での生成を物語る資料。含鉄部は表面寄りに広がっている。ただし、炭素量の低い生成初期の鉄部であろう。
112	炉内滓 (含鉄)	C区	3.4	3.8	2.2	26.9	5	H(○)	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	分析資料№ 12 140 頁分析資料詳細観察表参照。
113	炉内滓 (含鉄)	C区	5.5	5.8	4.0	166.4	6	H(○)	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑)	分析資料№ 13 140 頁分析資料詳細観察表参照。
114	木炭	C区	1.4	1.5	1.6	1.7	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	分析資料№ 14-1 140 頁分析資料詳細観察表参照。
115	木炭	C区	3.0	1.5	1.5	2.0	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	分析資料№ 14-2 140 頁分析資料詳細観察表参照。
116	木炭	C区	2.3	1.4	1.3	2.1	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	分析資料№ 14-3 140 頁分析資料詳細観察表参照。
117	木炭	C区	0.9	0.5	0.5	0.3	1	なし	1号炉東排滓坑 (S112 東土坑) 区層	-
118	木炭 (C 14 分析用)	C区	1.7 1.3	0.4 0.4	0.4 0.4	0.3 0.1	1	なし	1号炉 (S112)	第5章第1節参照
119	たたき石 (ハンマーストーン)	C区	9.1	6.6	6.6	588.3	1	なし	1号炉西排滓坑 (S112 西土坑)	表面の6面に打痕を残す、にぎり拳大のたたき石の完形品。側面3面が窪みとなるよく使込まれた打面で、短軸側の両側面と下面は打痕は残るが、窪みにはなっていない。上面の打痕の肩部や側面に茶褐色の錆色が確認される。石質は角閃石安山岩。転石を母材としたもので、含鉄の炉内滓から小ぶりの鉄部を割り出す用途に用いられた可能性がある。実際に鉄部を金属製の金槌で割り分けるとも率が良いことが実験例で実証されている。鉄床石自体は発掘調査では検出されていない。

(作製 六澤義功)

c 溝(水路)跡

第1号溝(SD-5)(第28図)

調査区中央を東西に貫く形で150mにわたって検出された古代の水路である。上流側にあたるD区西端で幅1.25m、深さ1.25m、底面標高10.70m、最も下流側のA区東端部で幅2.0m、深さ0.9m、底面標高10.55mである。この傾斜は100mで7.5cm下るといふ緩やかなものである。断面形状はU字形である。ほぼ一直線に伸びるが、A区でやや南に振れる。これはそのまま東側に延長すれば古代の道路に突き当たることから、徐々に南に曲げて、最終的には道路の南側に沿って東進するようにしたのであろう。

底に砂層があり、流水があったことが堆積状況からわかる。少なくとも2回の掘り直しが認められる。

遺物(第30図)

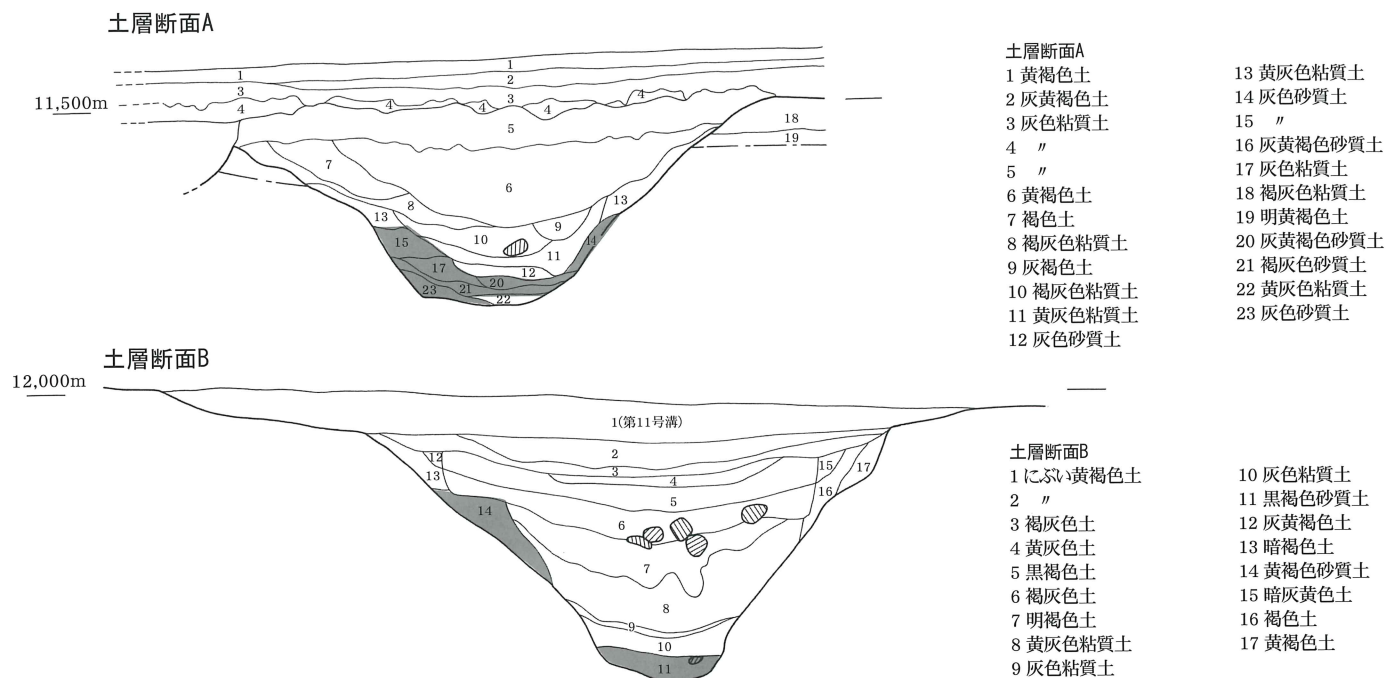
第30図120から123、および第31図124と125が出土遺物である。完形の壺形土器1点と、木製鋏、それに直径27cmの何らかの蓋と思われる円形の板しかない。鋏(第31図124)は残存長40.6cmで、残存長は40.6cmで、全形は杓子形を呈する。基部は幅6.9cmで長く伸び、そのほぼ中央に4.2cm×3.9cmの方形の柄穴が穿たれている。そして、その穴の約2cm基部先端側に釘の頭様のもが見える(金属探知機による金属反応は無し)。基部の先端部は薄くなり、両側には浅い抉りが入る。刃部は最大幅15.3cmで、二又になっているように見えるが、基部に近い方に方形の穴が穿たれていた可能性があり、その場合は穴が2カ所あったことになり、先端部は二又ではなかったことになる。刃部は薄く5~6mmほどしかなく、鉄製の刃部が装着されるのであろう。柄は曲柄で基部に縄縛したものか、直柄で柄穴に固定したものか、その使用方法は不明である。あるいは犁のように使用した可能性があるが、その場合にはあまりにも薄く、使用に耐えられない可能性があるため、ここでは、一応鋏として扱っておく。

出土土器は、後世の混入と考えられる土器(122の土師器杯と123の瓦質土器鍋)を除くと、須恵器高坏脚部と土師器小型壺である。第30図120の須恵器脚部は、端部が小さくつまみ上げられており、古墳時代後期のものである。121の壺は外面をへら削りしており、形態的には古墳時代の埴を思わせる。類例に乏しいが、古代のものであろう。

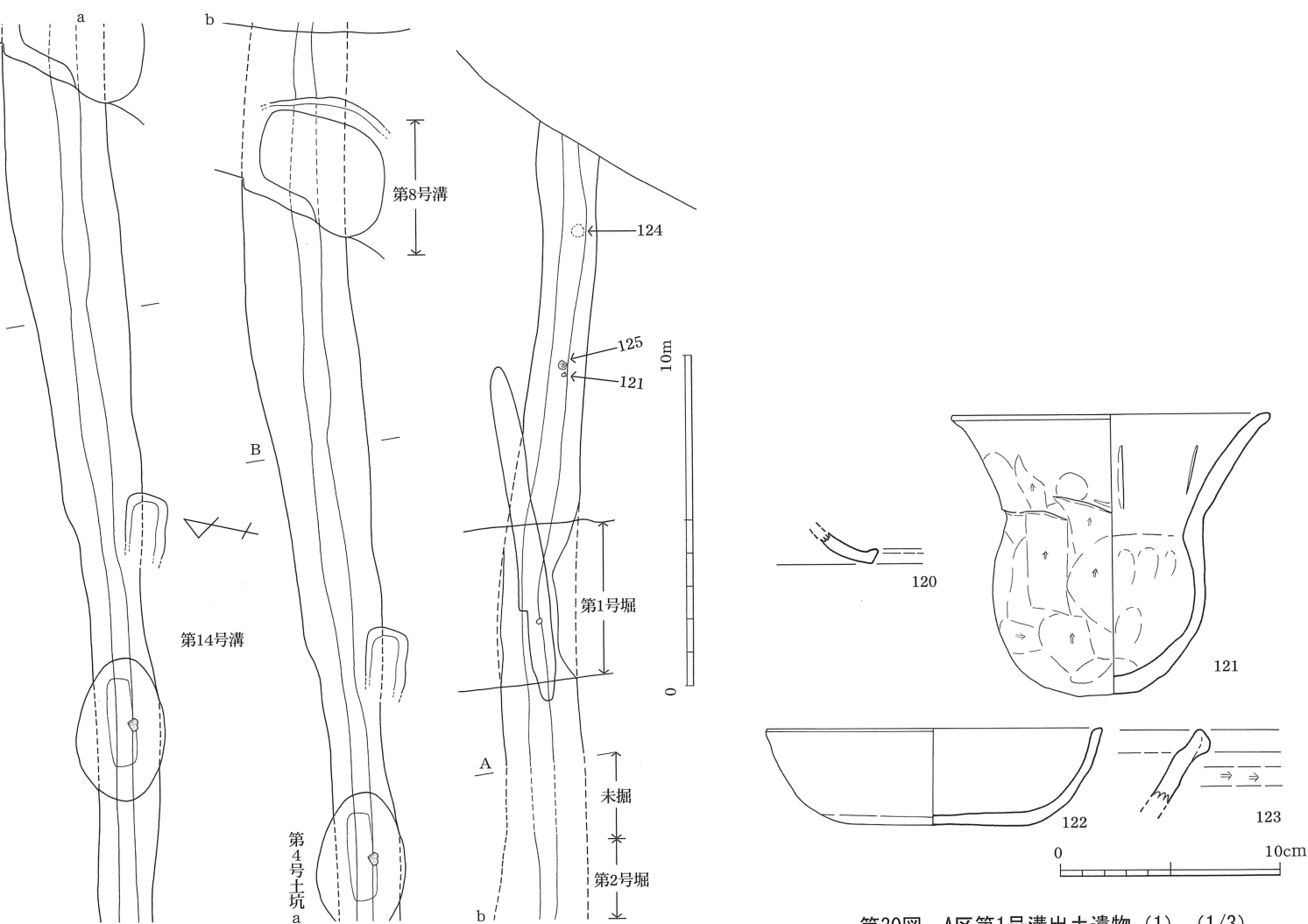
第2号溝(SD-2)(第32図)

B区で確認された北東から南西方向に直線的に伸びる溝で、最大幅3.2m、深さ1.4~1.5mである。東側はB区の区画溝である第8号溝により切られており、西側は同じく区画溝と考えられる第9号溝で切れ、さらにD区に伸びている。

出土遺物は第30図126と127である。126は甕形態であるが、本来は127の把手が付く甕であろう。器壁は薄く作られている。

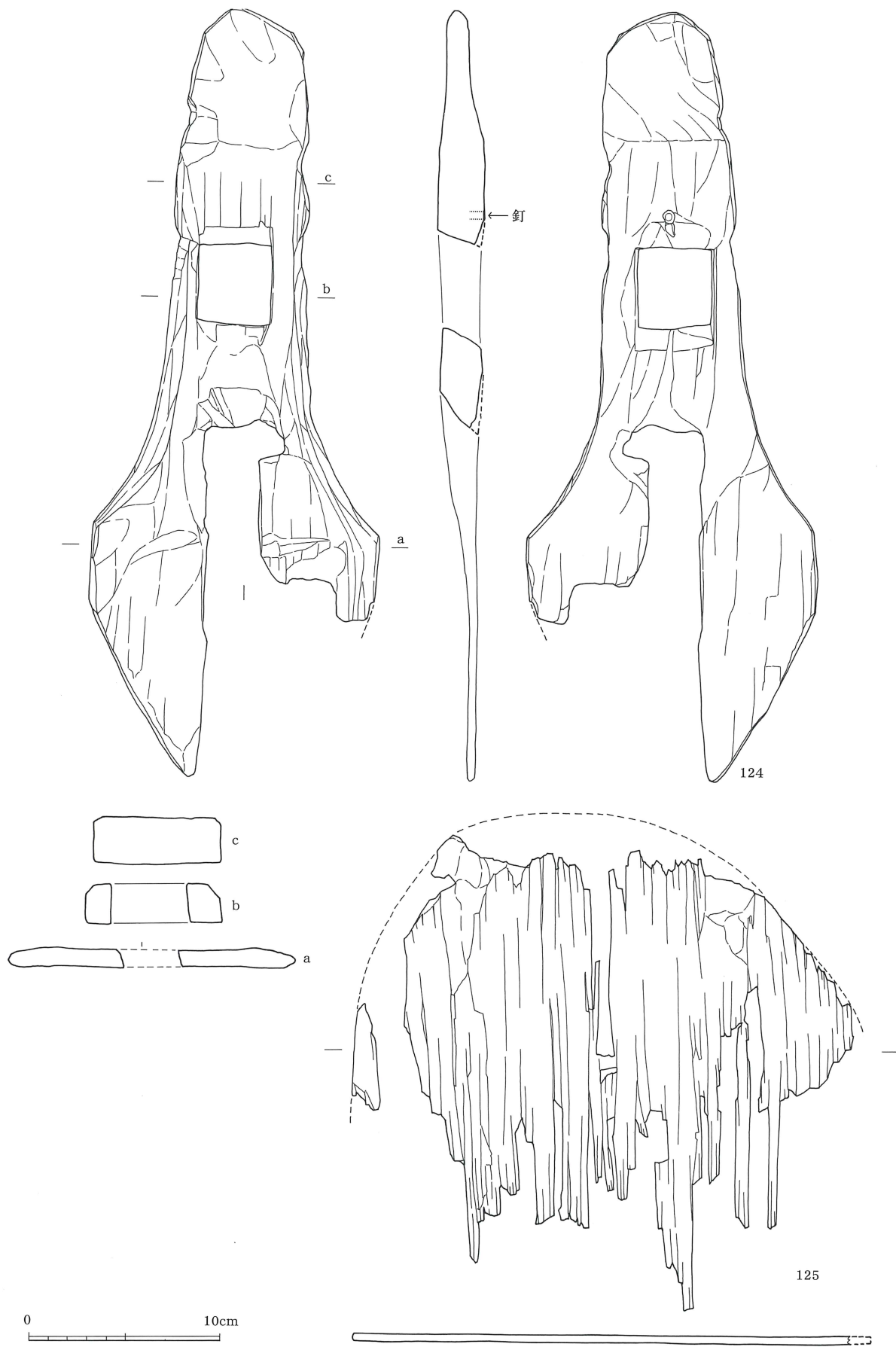


第29图 A区,B区第1号溝土層断面图 (1/40)

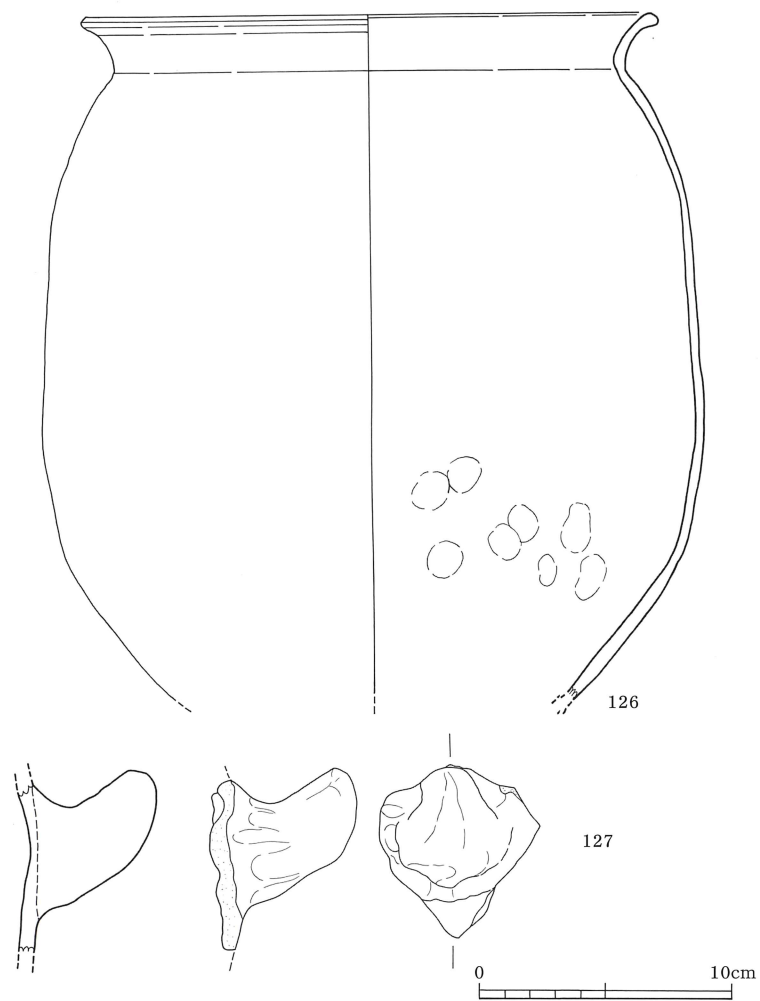


第30图 A区第1号溝出土遺物 (1) (1/3)

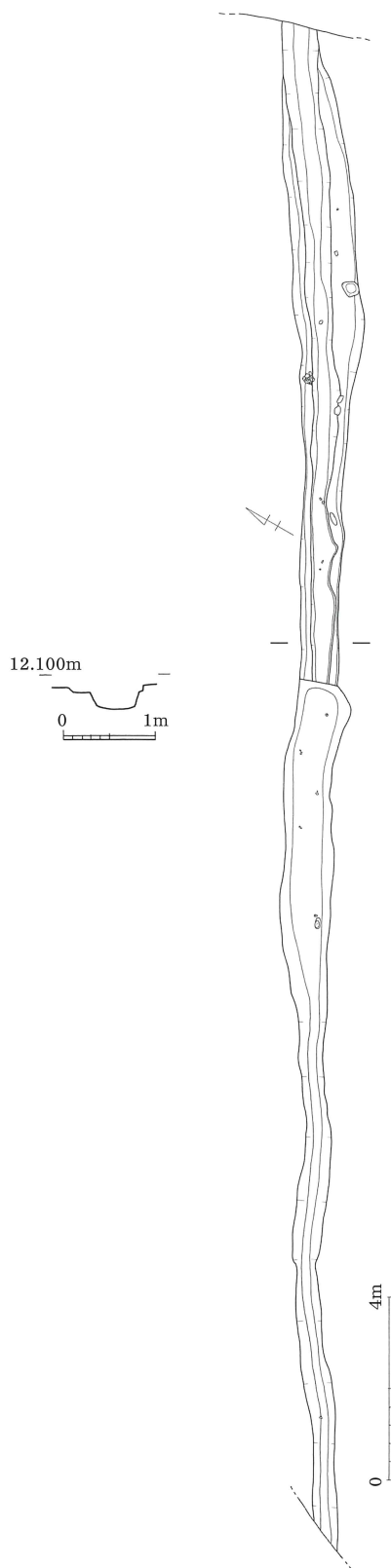
第28图 A~D区第1号溝実測图 (1/200)



第31图 A区第1号溝出土遺物 (2) (1/3)



第33図 B区第2号溝出土遺物 (1/3)



第32図 B区第2号溝実測図